

396.5  
R42

軍刀の操法及試斬  
陸軍戸山学校編



0057068-000

396.5-R42ウ

軍刀の操法及試斬

陸軍戸山学校・編

国防武道協会

昭和19

AJF

973  
160

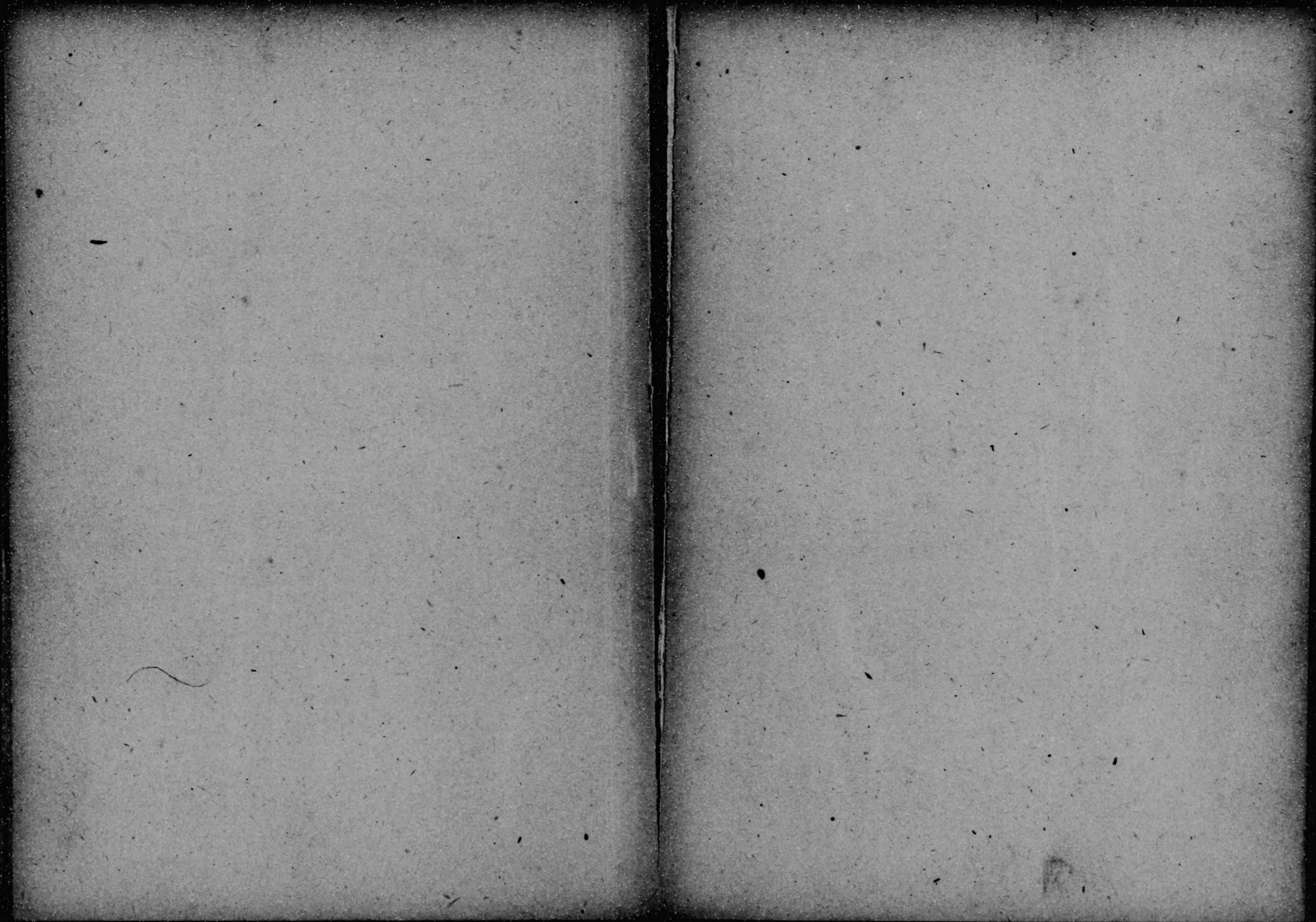
# 軍刀の操法及試斬

---

陸軍山學編校



國防道協會發行



39.6.5  
R42



軍刀の操法  
試 斬

陸軍山學校編

國防協會



873  
160

## 序

當校に於ては曩に時局の要望に應へ、軍隊の帶刀本分者に普及する目的を以て「軍刀の操法及試斬」を昭和十五年十一月、「短期速成教育軍刀（一撃必殺）訓練要領」を昭和十七年一月、夫々偕行社記事に發表せり。然るに年月の経過と共に、軍部は固より一般よりも之れが單行本としての頒布を希望する者極めて多き爲、今回「短期速成教育軍刀（一撃必殺）訓練要領」を「軍刀の操法其の一」に、從來の「軍刀の操法」を「軍刀の操法其の二」に改め、兩者を合冊し若干の修正を加へ、上司の認可を受け一般に公にすることとせり。

而して「軍刀の操法其の一」は、斬撃刺突法の基礎的動作を體得せしむるを主眼とし、之れに依り身體の構へ、斬撃、刺突の要領、體の運び及刀勢を會得せしめ、「軍刀の操法其の二」は敵の状態に應じ、軍刀を合理的且的確輕捷に使用するの術を修練するを主眼として、之れに依り實戰に臨み、瞬時に敵の死命を制するの氣勢及刀勢を

會得せしむることを期し立案せられあり、故に修練に方りては、其の一、其の二の順序に行ふを必要とし、又其の一の要領を正確に修得したる後に於ては、其の二の修得易々たるものとす。

凡そ劍を學ぶ者竹刀のみの修練を以て足れりとするときは、實戰に用を爲さざる小手先の技術に墮し、或は刃筋を辨へざる斬撃を行ふ等の弊に陥り易きは勿論なるのみならず、常に自己の軍刀に親炙し、其の特性を把握するは武人の嗜なり。特に試斬は之が經驗に依り、必殺の確信を與ふるものなるを以て、遂かに應召の天命を承け戦線に趨せ參ずる者にして、軍刀の操法の修練の暇なきとき等の場合に於ても、本書記載の試斬は是非實施するの要あり。

茲に本書刊行の趣旨を明にすると共に、讀者は敍上の趣旨を翫味し、軍刀の操法及試斬を練磨せんことを切望する次第なり。

昭和十八年十一月三日

陸軍戸山學校長 鶴澤 尙信

(2)



(其の一)

趣旨	……………	(三)
一、目的	……………	(三)
二、本訓練要領の特長	……………	(三)
三、訓練事項	……………	(三)
四、實施要領	……………	(三)
五、實施上の注意	……………	(九)
六、訓練計畫の一例	……………	(九)
七、参考) 劍術、刀の操法、試斬の比較	……………	(二四)

(1)

## 趣 旨

昨今入隊中のものにして、直ちに野戦勤務に服すべきに拘らず、劍術の心得なく、或は初歩者にして軍刀に對する信頼及自信力は勿論其操法をだに辨へず、眞に幹部たるの名を辱しむるに非ずやと思はしむるもの頗る多し。

斯くの如きものに對しては、機を捉へ、至短時間に而も容易に且有效適切なる速成教育を實施し、以て白兵戦に於ける必勝の確信を堅持するに至らしめざるべからず。

従來、本校に於て研究發表せられたる「軍刀の操法」は初歩者として稍々複雑且修得困難なるを以て、先づ本訓練の要領により基礎的教育を實施し、爾後機を得るに伴ひ、軍刀の操法及試斬を行ひ、白兵使用に習熟せざるべからず。而も最近の緊迫情勢に即應する爲め、速かに一般に普及するの要極めて大なるものあるを痛感す。

(2)

## 軍刀の基礎的斬突訓練要領

### 一、目 的

劍術の経験なきもの、又は経験少きものに對し、短期速成的に軍刀の基礎的斬撃刺突方法を演練し、以て白兵戦に應じ得る自信力を附與せんとするに在り。

### 二、本訓練要領の特長

1. 訓練の動作方法を其の儘實戦に應用し得。
2. 構成極めて簡易。
3. 修得容易。

### 三、訓練事項

1. 眞直に斬下す動作。
2. 眞直に刺突する動作。
3. 斜方向（右及左）に斬下す動作。

### 四、實施要領

1. 停止間に於て使術の要領を會得せば漸次緩なる歩度による行進間の使術を演練す。

(3)

2. 行進間に在りては停止間の諸動作に準ずるも特に左の件に留意す。  
刀は右(左)片手にて提げて前進するも、敵の間合に接する迄に構刀の姿勢にあるを要す。(第一圖)
3. 輕装にて行ふ諸動作の要領を會得せば漸次軍裝を以て其の要領を體得せしむ。
4. 平坦地に於ける訓練を終れば不齊地に於て行はしめ輕易なる材料又は假標に對する斬突を行はしめ又は人員に對し竹刀を以て演練せしむ。
5. 主として兩手にて操作する場合を記入す、片手にて操作する場合の要領は兩手の場合に準ず。
6. 本訓練は通常構刀の姿勢より開始し斬撃刺突後は速かに構刀の姿勢に復歸す。



第一圖 敵との間合に入る迄の刀の携行姿勢を示す。  
1、刀尖は右足の外側に在り、刀扱は少しく外に向けあるを要す。  
2、刀鞘は懸吊式を避け差込み式を可とす。

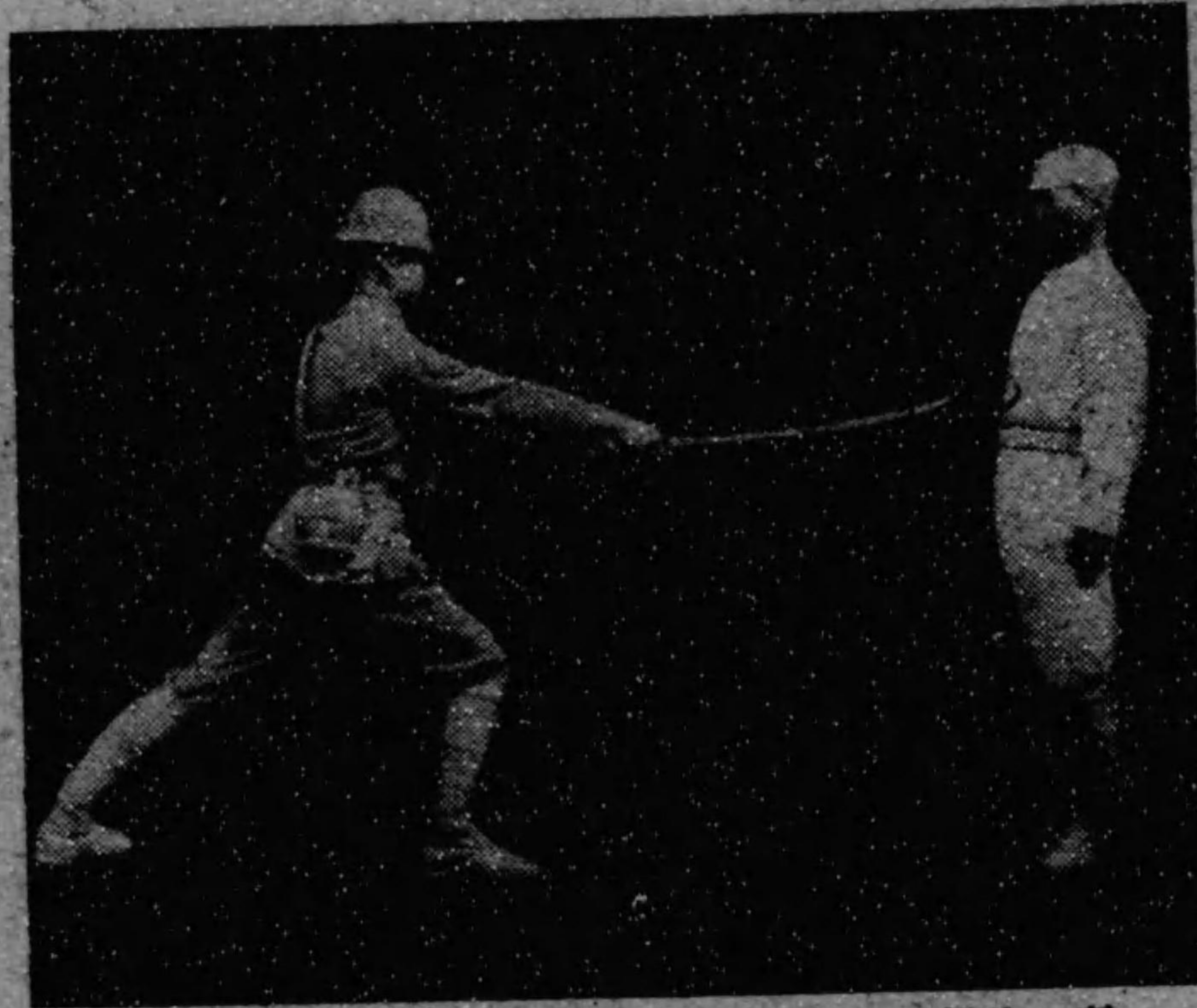
要旨 敵の身體を真正面より真二つに斬下ぐる意氣込みにて真向より斬る動作なり。  
其の一 眞直に斬下す動作(兩手正面斬り)

號令	呼唱ヲ以テ行フ場合	動作
正面ヲ斬レ	2 1 又ハ 1	刀ハ左右ニ偏セズ大キク振り冠ル、左足ニテ踏切リ、右足ヲ地ニ近ク過ギ大キク一步踏出シ、平ニ踏著ケテ體重ノ大部ヲ中央ニ托シ、同時ニ左拳ヲ内方ニ握リ、腕部ニ來ル如ク拳ヲ内方ニ握リ、腕部ニ來ル如ク面ヲ水月ノ際、刀尖ハ少シク下方ニ向ヒ、左足尖部ヲ利カシテ自然ニ保ツ。
構	3 又ハ 2	左足ヲ右足ニ引著ケ構刀ニ復ス。



第二圖 斬下ぐる前に刀を頭上に振り冠りたる姿勢を示す





敵の胸部に突刺したる姿勢を示す。



第五圖の突刺の最後を姿勢の側面より見たるもの。此の際に元元刺す如き強剛なる突刺を要す。

(7)

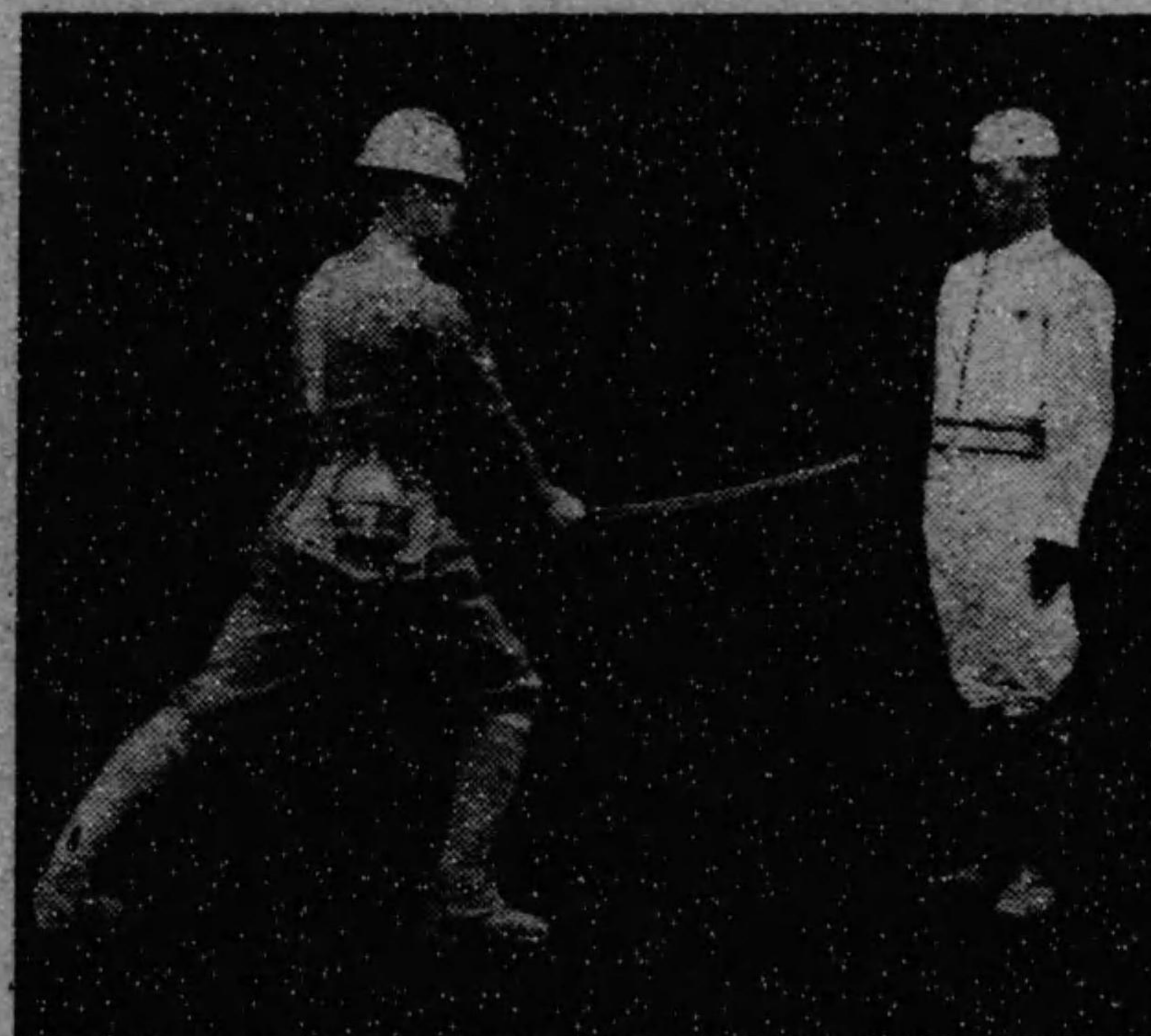
第五圖

抜	突	號令	呼唱ヲ以テ 行フ場合	動	第一本ノ要領ニ準ジ、右足ヨリ快速ニ進出スルト同時ニ左拳ヲ前上方ニ右拳ヲ其ノ左足ヨリ後退スルト同時ニ両手ヲ以テ眞直ニ引抜き構刀ニ復ス。
ケ	ケ	1			

第六圖

要旨 敵の背部迄刺貫する如き意氣込みにて胸部（腹部）を刺突する動作なり。

其の二、眞直に刺突する動作（両手刺突）

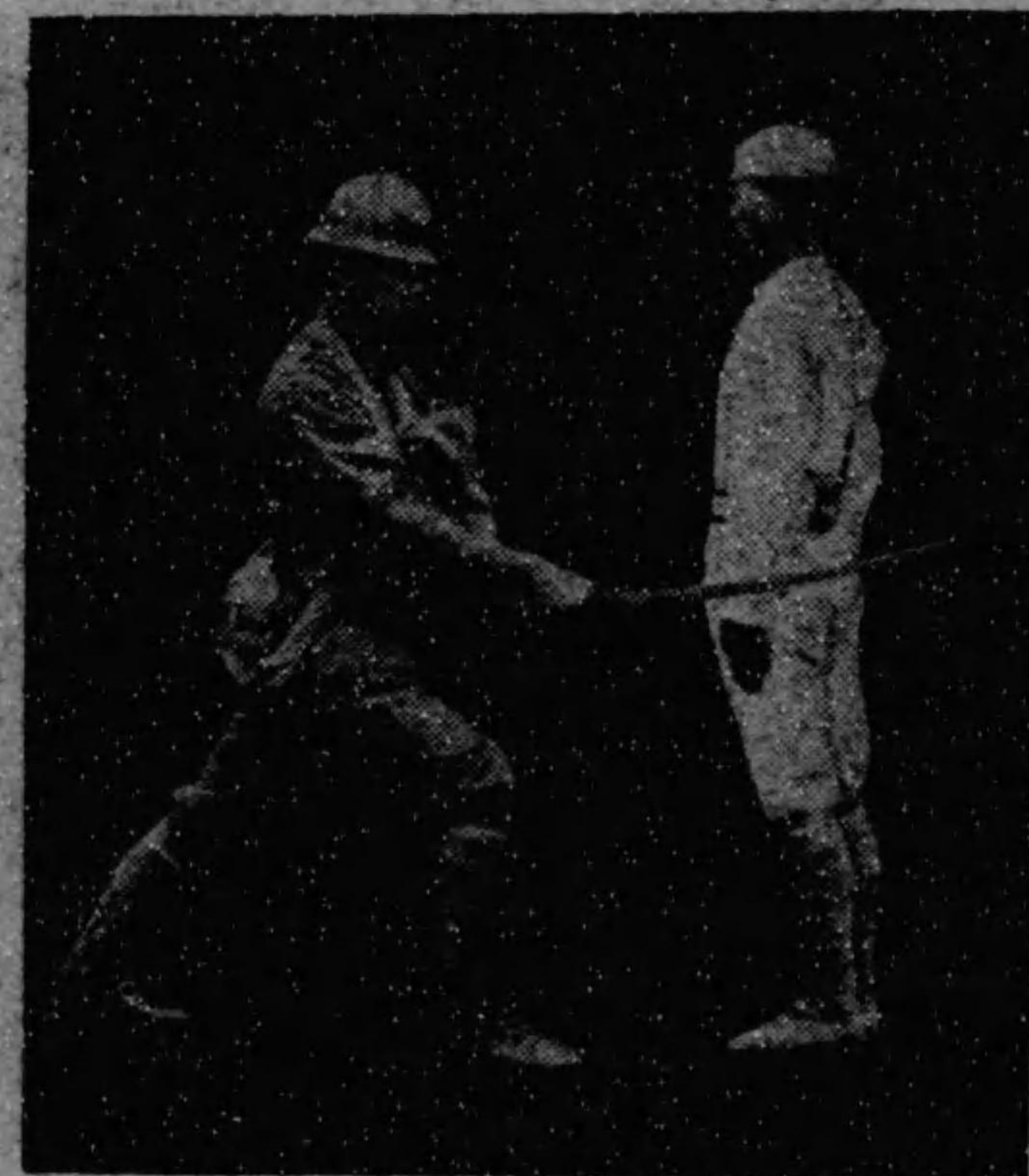


第四圖 ↑

第三圖 敵の正面より水月附近迄斬下げたる姿勢を示す。此の際に膝を屈げて重心を下ぐると共に右脚は稍々右前方に踏出す可とす。

第四圖 敵の正面より水月附近迄斬下げたる姿勢を示す。此の際に元附近にて切斷する如く接近すると共に刀勢のある如く振り冠りたる力を利用して大業にて斬撃するを要す。

第三圖 ↓



(6)

其の三 兩手右(左)斜斬(左(右)發聲斬り)。

要旨 敵の身體を斜に眞二つに斬下ぐる意氣込みにて左(右)頸部より右(左)腰部附近に斜に斬下ぐる動作なり。

號令	呼唱ヲ以テ行フ場合	動作
右(左)ヨリ斜ニ斬レ	1) 又ハ	刀ハ大キク兩手ニテ振り冠ル、左(右)足ニテ踏切リ右(左)足ヲ大キク一步踏出シ同時ニ兩手ヲ以テ劍尖ニテ大圓弧ヲ描ク右(左)上方(敵ノ左(右)頸部)ヨリ左(右)下方(敵ノ右(左)腰部附近)ニ斜ニ斬下グ、左(右)足ヲ右(左)ニ引キ著ケ構刀ニ復ス。



第七圖 敵の姿勢をたげ、左(右)の勢を以て、右(左)の腕を以て、下斬を要領する。



第八圖 敵の姿勢をたげ、左(右)の腕を以て、下斬を要領する。

五、實施上の注意

1. 拔刀、納刀の際手其他自己を傷つけざると共に他人を傷つけざること。
2. 刀を握るには無暴の力は不可なるも相當の強き力を用ひて最初より握るを要す。
3. 力は振り冠りたる力を利用し概ね物打附近に全力の集中する如く斬下ぐるを要す。
4. 斬下したる際、上體は概ね眞直にし稍々膝を曲げ重心を下ぐるを要す。
5. 少くも停止間、藁等に對し實物斬撃、刺突の體驗を得しむること。
6. 行進間の斬撃、刺突(空間又は實物に對する)は總て基礎的斬撃、刺突の要領による。

短期速成教育軍刀(一撃必殺)訓練計畫の一例

方針	劍術ノ未経験者又ハ經驗少ナキ者ニ對シ短期速成的ニ軍刀ノ斬突方法ヲ演練シ以テ白兵戰ニ應ジ得ル自信力ヲ與セントスルニアリ
立案ノ基礎	被教育者ノ程度ハ初歩者トシ教育者ニ教官一、助教二ヲ以テ五〇名内外ノ教育班ヲ編成シ、一週約十時間ヲ使用ス 材料「軍刀」(各人一〇箇及長サ一米指大ノ女竹、樹枝)二〇〇箇、防具若干

備考	第六回	第五回	第四回	
本計畫ハ天候氣象ニ依リ日課場所等ヲ變更スルコトアリ	夜間劍術 1. 實員ニ對シ連續突破斬突 2. 連續突破假標斬突	連續突破假標斬突不齊地 連續突破假標斬突	假標斬突 1. 其ノ場前斬突 2. 疾走斬突 3. 疾走斬突 4. 疾走斬突 5. 疾走斬突	
	1.00	1.30	1.30	
	已ヲ捨テル	一、不揃不届 一、必勝ノ信	一、對敵觀勢ナル 一、敏捷實ナル	確實ナル斬突
	第四、第六回ノ要領ニ準ジ、 實施ス	一、數線ニ配置セル拵指シ大 一、四回ノ要領ニ準ジ實施シ大	一、初線ニ配置セル拵指シ大 一、實員ニ對シニ速次速度 一、演習員ニ對シニ速次速度	一、竹等ハ小指大ノ莖束、 一、對敵ハ各時ニハ對シム 一、數名ハ同時ニハ對シム 一、且、速正度ヲ求メシム
一、木場所及自己ノ軍刀 一、木竹刀ヲ用フ	一、木場所及自己ノ軍刀 一、木竹刀ヲ用フ	一、木場所及自己ノ軍刀 一、木竹刀ヲ用フ	一、木場所及自己ノ軍刀 一、木竹刀ヲ用フ	

備考	第三回	第二回	第一回
本計畫ハ天候氣象ニ依リ日課場所等ヲ變更スルコトアリ	兩手(左、右)斜斬突 1. 其ノ場前斬突 2. 疾走斬突 3. 疾走斬突 4. 疾走斬突 5. 疾走斬突	兩手刺突 1. 其ノ場前刺突 2. 疾走刺突 3. 疾走刺突 4. 疾走刺突 5. 疾走刺突	兩刀拔動動作 1. 其ノ場前斬突 2. 疾走斬突 3. 疾走斬突 4. 疾走斬突 5. 疾走斬突
	1.30	1.30	1.30
	確實ナル斬突	確實ナル刺突	一、敵ノ氣壓伏 一、斬實ナル
	右 同	右 同	一、施セテハ動作毎ニ分テ實 一、各動作ニハ最初ハ緩徐ニ 一、連度ヲ要スルハシメ速次ニ 一、得空ニ於ケル後、動作ニ對 一、シテハハシメ速次ニ
右 同	右 同	一、技實中委勢及 一、ニシテハ者ニ 一、ツキ正スル者ニ 一、ニシテハ者ニ	

## 六、教育實施後の所見

(一) 本訓練は劍術の未経験者及若干の経験を有する者に對するのみならず相當経験を經たるものと雖も全部體驗せしむる必要あるを認む。  
從來各隊の劍術の實施は教範の研究不充分にして單に基本教育の試合而も六歩の距離にて行ふ試合を到達目標とし突撃を加味する教育即ち格闘訓練を顧慮せる教育なく、甚だしきは競技會本位の試合を最終の目的となしありしが如く、突撃を最終の目的とせる眞銃眞刀の訓練を見て始めて格闘訓練あるを知りたる如きもの大半にして、隊長以下殆ど全員此の種訓練の必要を高唱せらる。

教育後に於ける一、二の所見を引用すれば左の如し。

1. 眞劍に對する根本的觀念を得たり(甲)、眞刀に於ける特殊なる感覺を幾分なりとも體得し白兵必勝の確信を得る一方途となりたるは幸なり(乙)。
2. 其の操作に於て軍刀術に於けるが如き要領にては全く用をなさざることを痛感せり。斬撃に於て腰を落すことは始めて體驗せり。
3. 本教育は軍刀携行者全般に對し行ふ必要あり。

4. 劍術に於ける其の精神、使術を眞刀に持來たりし時の崇高なる新鮮味を味ひ得、今後に起り得べき白兵戦闘の感覺を知り得たり。

5. 眞刀の操作は劍術と若干差異あり、眞刀使術の妙諦を若干感得せり。

(二) 此の種教育は出勤前に補備的に教育すること勿論必要なるも、平素の教育訓練にも活用の餘地極めて大なるものあるを認む。

特に短期教育に於ては先づ本訓練を實施し時間の餘裕ある場合に於ては從來の如き基本教育を主體とする教育を行ふを可とせん。

所見の一例

1. 劍術と眞刀とは相當に趣を異にせり、劍術は稍と術に走り易し、從來學校に於ては劍術の指導は良く受け得たるも、眞刀の指導は皆無にして今回始めて教育を受けたり。
2. 眞刀と竹刀を用ひたるときは精神に於て大いに異なる所あり、眞刀は生命の潜むが如く感ぜらる、之を扱ふには技と共に精神を集中すること必要なり、戦場の實相を考ふるとき特に然りとす。

(三) 教育資材に就て

1. 試斬刃の備へ付ある所となき所とあり。なし得れば若干本備へ付け平素適時使用せしむると

共に、出動に際しては各自の軍刀を持ちて必ず體驗せしめ各自の軍刀に信頼せしむるを要せん。  
 2. 従來三八式歩兵銃を使用するは命中精度に大害ありとなし甚だしく嫌厭しあるもの少からざりしが如きも、本校に於ける嚴密なる試験の結果何等の影響なきを以て特に出動部隊の如きは體驗せしむるの要切なるものあり。

(四) 實戰的教育指導の必要に就て

假標又は實員に對し突撃の要領にて眞銃又は木銃を以て行ふ訓練其の他格調訓練の如き教育は殆ど實施しあらざるが如く、今回の眞銃並に軍刀を以て行ふ訓練に對し多大の効果あるを高唱せらるゝ隊長多し。

従來の教練は劍術にて行ふ格調教育を無視し、突撃教育は形式に流れ、劍術は又單に六歩の距りをとりにて試合するに止り、突撃に歸納するが如き實施法を顧みず、教育は教練劍術相互に連繫なく寧ろ一方の教育を破壊するが如き一般の状態ならざるかと思惟せらる。

此の際特に突撃に歸納する劍術の指導並に教練を劍術の利用に依つて一段と改善普及するの要ありを認む。

参考 劍術、刀の操法、試斬の比較

左表の如く劍術、刀の操法並に試斬は各々特長を有するを以て訓練の餘裕を有する場合は三者を併せ教育するを理想とするも、短期速成的に未経験者又は若干の經驗を有するものに對し一擊必殺の目信力を養成せんとせば主として基礎的刀の操法並に試斬の方法を教育するを得策とす。

種類	概 念	有 利 ナ ル 點	不 利 ナ ル 點
劍術	主トシテ 彼我共ニ防具 ヲ裝著シ竹刀 ヲ持チテ演練 ス	一、負ケジ魂、捨身ニナリテ斬リカ、リ、 突キカ、ルコト容易ナリ 二、好機ニ乘ジ瞬時ニ斬突シ得 三、機敏、輕捷性ヲ養成シ得 四、業ノ修得容易ナリ	一、實際トハカナリカケ離レタル斬撃刺 突法ニ流レ易シ 二、小業トナリ眞刀ヲ持チテハ斬レザ ルハ、巧如キモノアリ 三、切先近クニテ打ツコト多シ 四、危險豫防上斬突部位ヲ限定セザルベ カラズ
刀	主トシテ 軍刀ヲ用ヒ敵 ヲ假想シ空間 ニ於テ斬撃刺 突ヲ演練ス	一、刀ニ慣レシム (抜キ方、納メ方、持チ方、斬リ方、突 キ方等) 二、抜キ方ヲ斬リツケルコトヲ得 三、對手ニ對シ各種方向ヨリ思フ所ヲ斬 リ又突クコトヲ得 四、體ノ構へ及體ノ移動ヲ實際的ナラシ ム 五、戰場ニ於テ完全軍裝セル場合ニ於テ モ容易ニ實施シ得	一、對手ナキヲ以テ注意セザレバ形式ニ 流レ易シ

斬 試

軍刀ヲ用ヒテ  
被切斷物ヲ直  
接斬撃刺突ス

一、斬撃刺突ノ實感ヲ得ル  
二、刀ニ自信ヲ持ツ  
三、自己ノ伎倆ヲ信賴ス  
四、刀ノ握リ締メ、臂力ノ用法、刀筋ノ  
方向ノ適否ヲ自得セシムルニ最有效ナ  
五、體ノ構ヘヲ自得ス

一、刀、被切斷物等ニ制限ヲ受ケ度々練  
習ヲ行ヒ得ス  
又極メテ基礎的斬突法ニノミ止ルコト  
多シ  
二、斬撃量ニ腐心シ狀況ヲ無視シ易シ

軍刀の操法 (其の二)

一、目的……………(一〇)

二、實施法の概要……………(一〇)

三、實施上特に注意すべき事項……………(一〇)

四、敬 禮……………(一〇)

五、準備姿勢……………(一〇)

六、拔刀及納刀……………(一〇)

七、操 法……………(一〇)

    第一本 (前敵)……………(一〇)

    第二本 (右敵)……………(一〇)

    第三本 (左敵)……………(一〇)

    第四本 (後敵)……………(一〇)

    第五本 (突撃)……………(一〇)

    第六本 (前後敵)……………(一〇)

    第七本 (左右敵)……………(一〇)

## 一、目的

軍刀を以て各種状況に應ずる斬突法を實際的に練習すると共に、特に實戦に鑑み、瞬時に敵を壓伏するの氣勢及刀勢を修練するにあり。

## 二、實施法の概要

帯刀し、敬禮の後、準備姿勢を取り、第一本より順次實施す。  
各動作終了毎に納刀し、準備姿勢に復したる後、次の動作を開始す。全動作終了せば準備姿勢を解き敬禮す。

## 三、實施上特に注意すべき事項

- 一 心を静め、特に下腹部に力を充實して實施す。
- 二 各動作は其の意義を十分理解し、之が緩急節度を状況に適合せしむる如く實施す。
- 三 刀の操法に於ては、特に刀刃の方向と、臂力の用法とを正しくし、努めて斬突量を大ならしむる如く著意するを要す、之が爲迅速よりも先づ確實なる刀の操法の修得を第一義と心得ふべきも

のとす。

- 四 斬突に際しては通常 エイ 若くは ヤア 等の發聲を伴はしむるものとす。
- 五 危害豫防並に軍刀の愛護上、四周上下に對しては深甚の注意を拂ひ、人畜を傷け或は刀尖を毀損するが如きことなきを要す。

## 四、敬禮

開始及終止共に通常帯刀（刀差に帯ぶ）の儘不動の姿勢にて敬禮す（陸軍禮式令室内外の敬禮）



第一圖 正（面）を柄刀に前を  
後前くし正を刀び帯てしに上を  
むしは向に

（第一圖・第二圖・第三圖）

拔刀、納刀動作を省略して行ふ際は肩刀にて敬禮す（第四圖）。

「注意」刀緒は拔刀、納刀動作を省略して行ふ場合之を使用し、然らざる場合は通常之を刀より離脱するか若くは短く結びおくを可とす。



(面側) 圖六第



(面正) 圖五第

捷路を経て上方より握り、右手の食指にて發條を壓し(異式のものには之に準ず)兩手を以て鍔口を切り、此の間に左手食指を握り込みて刀身の閉鎖を防ぎ、且つ左手拇指を以て鍔を内側(右側)より、刀の抜けざる如く押へ(第七圖)たる後、右手を刀より離して不動の姿勢に復し、左手にて刀を正しく前後に向け確實に保持す。

二 本姿勢は敬禮の後、直ちに之を取り、爾後各動作終了毎に、納刀に引續き、左手を以て刀を準備姿勢に保ち、右手を刀より離すと同時に、左足を右足に引き著けて準備姿勢に復す。

全動作終了せば兩手を以て刀の準備姿勢を解き不動の姿勢に復す。



三約は度角のと體と刀 圖四第  
むしらな度十



(面側) 圖二第↑

圖三第↓



### 五、準備姿勢

一 準備姿勢とは不動の姿勢に於て左手を以て刀を抜刀準備の姿勢に保ちたる姿勢を謂ふ(第五・六圖)。

其の要領は不動の姿勢より、左手を以て鍔に接して鞘を、右手を以て鍔に近く刀柄を共に





左るけ於に勢準備 圖七第  
(法持保の刀の手)



(面正) 圖八第↑

く向に方後を部双(面側) 圖九第↓



(22)

三 拔刀、納刀動作を省略して行ふ際は、特に示すものゝ外肩刀の姿勢より右臂を下方に自然に伸し刀尖を下げて刀を保持せる姿勢(第八、九圖)を取りたる後動作を開始し、爾後各動作終了毎に左足を右足に引き著くと同時に右姿勢に復歸し、全動作終了せば肩刀の姿勢に復するものとす。

## 六、拔刀及納刀

一 拔刀の要領は、準備姿勢より左手を以て柄頭を僅に内にし(體の略々中央前)つゝ、刀刃の方向を外方に向くと共に、右手を以て刀柄を下方より鏝より僅かに離して握り(以上拔刀準備と謂ふ(第十圖)、刃部を鞘に擦らざる如く方向を正しく抜く。

### 第十圖 拔刀準備

イ、刀刃の方向を外方に向くる度合は拔刀直後の斬突法に依り異なる。  
ロ、頭は敵方に向く。



二 納刀の要領は左手を以て其の拇指と食指との間に鯉口を握り込む如く、鞘を上方より握り、之を僅かに(約四十五度)外方に傾けて保持したる後(第十一、十二圖)刀を持ちたる右臂を自然に屈けて、刀背を左手拇指と食指との握合部及同附根部に當て(第十三、十四圖)之に沿ふて刀背をこらし、刀尖が鯉口に至る如く、右手を前方に出すと共に、腰を左に捻りて動作を容易ならしめ(第十五、十六圖)、以て刃部を鞘に擦らざる如く徐ろに納む。

(23)



圖六十第↑



圖五十第↑

る垂に然自は臂左(兩側)圖八十第↓ (面正) 圖七十第↓



圖二十第↑



圖一十第↑

圖四十第↓

圖三十第↓



三 拔刀、納刀動作を省略して行ふ際の抜刀準備は刀背を左前膊外側に、恰も帯刀の際抜刀するが如き姿勢に當て、刀を動揺せざる如く保持するものとす(第十七・十八圖)。

四 納刀は一通り要領を會得し、暗夜と雖も故障なく行ひ得れば足れり。蓋し實敵を斬突せば、必ず刀を拭ひたる後に非ざれば納刀することなきより考へれば、納刀は力を入れて訓練するが如きは愚の骨頂にして、平時武道の弊といふべきなり。

七、操 法

第一圖 註、刀刃を外側より略々下方に向く



第一本 (前敵)

意義 前方の敵が刀柄に手を懸け抜刀せんとするに對し、先づ其の前臂及體を下方より斬り、續いて其の敵の後退するを追込みて正面を斬る。

動作及説明 一 前方の敵に對し、抜刀準備をなしつゝ左足より前進し(第一圖)、二歩目の右足を足尖を正面にして、一步踏み出すと同時に抜刀し敵の右前臂及體を下方より右前上方に斬り上ぐ(第二、三圖)。



第二圖 註、刀背を上方より略々前方に向く



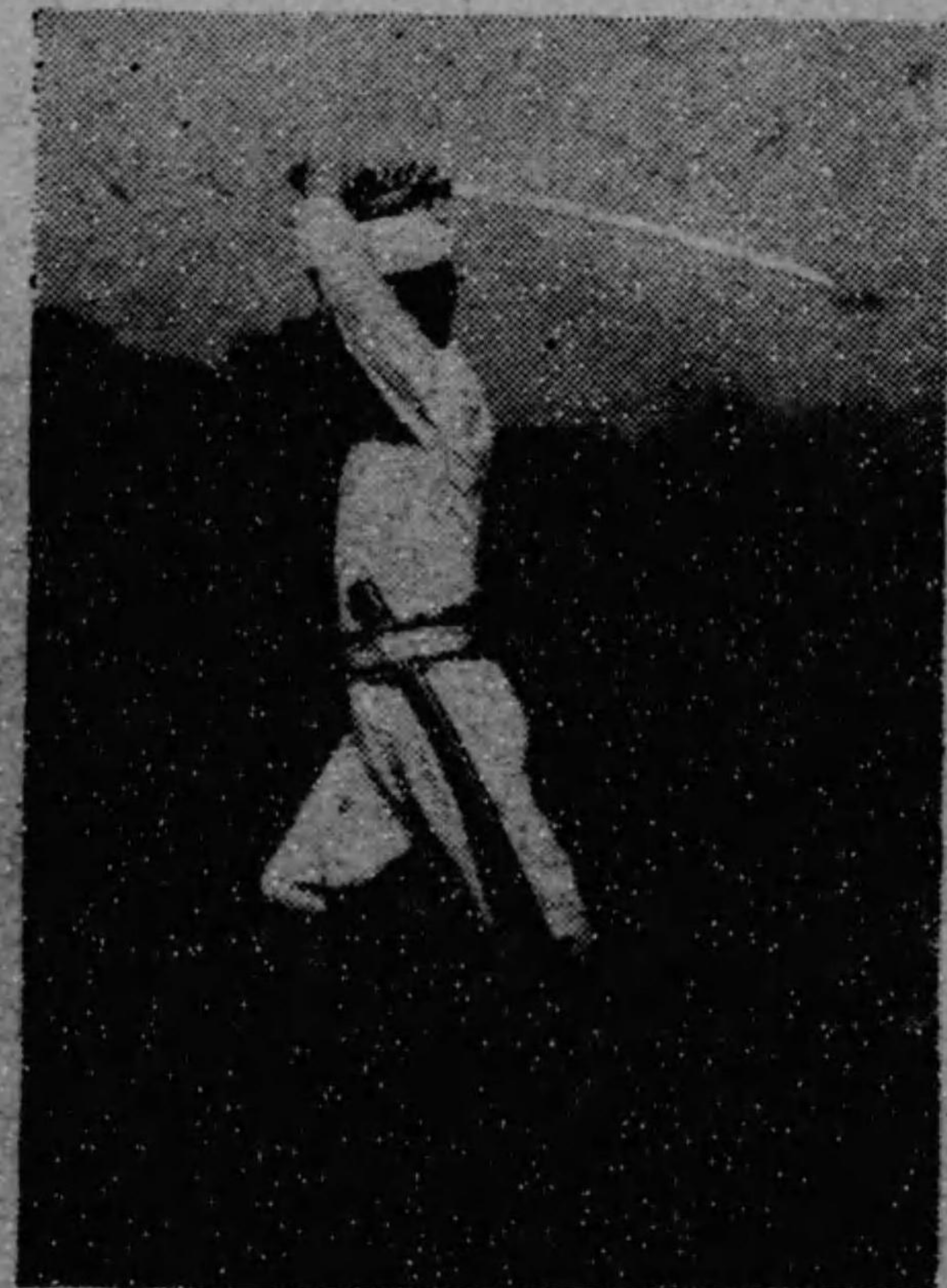
第三圖 註、刀背を上方より略々前方に向く

二 後退する敵を、刀を頭上に両手にて振り振りつゝ左足より二歩追込んで其の正面を斬る(第四・五・六・七圖、四一六は追込みつゝ刀を振り渡る要領を示す)。

三 右足を基準にして徐ろに構刀の姿勢を取りつゝ、殘心を示す(第八・九圖)。「註」殘心とは、爾後の變に應ずる心構を謂ふ。

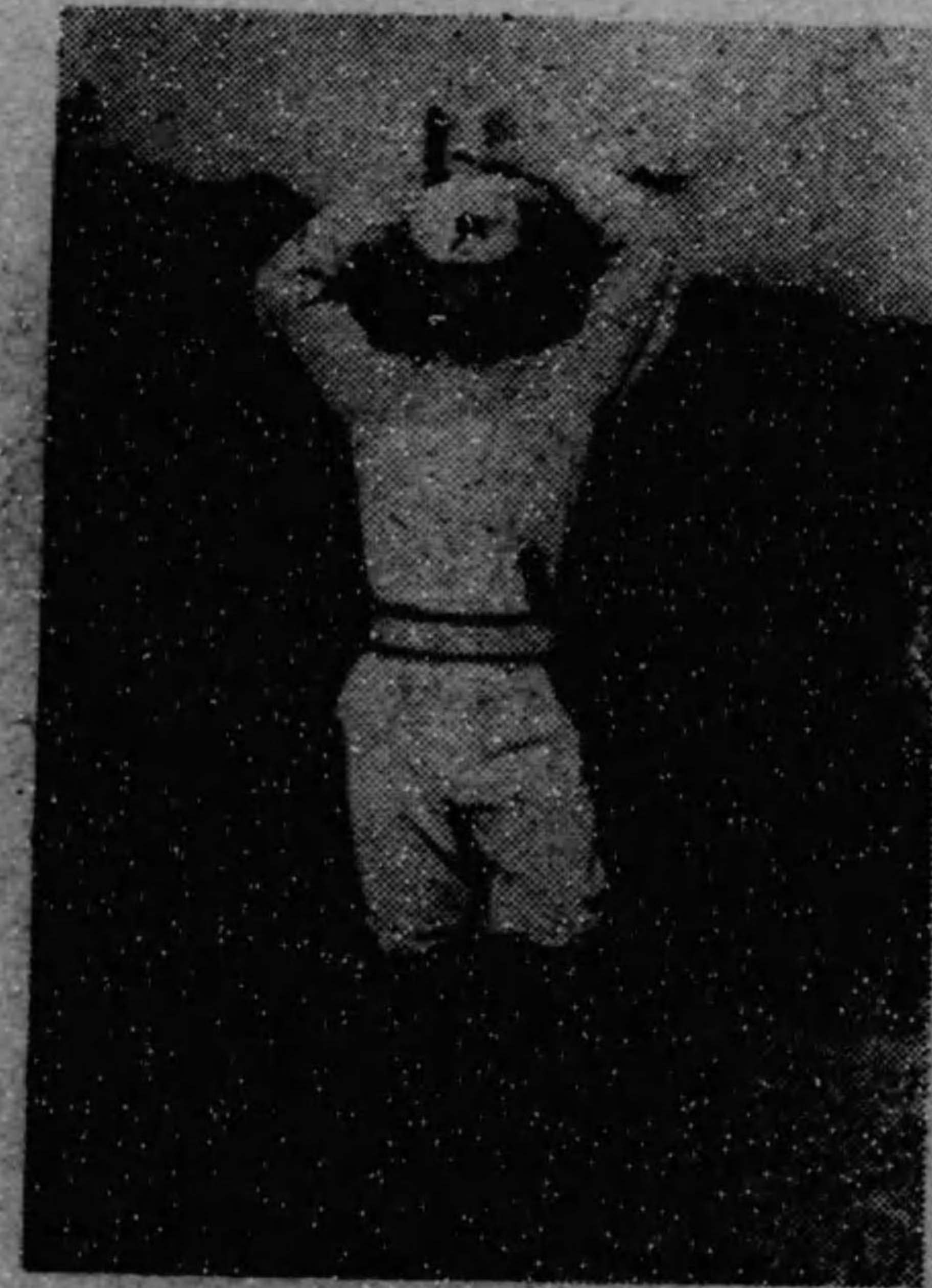
四 納刀の要領にて刀を納む。





↑ 第五圖 斬り下りたしる尖刀の高  
はさりと高膝とす

↓ 第七圖 (側面)



第六圖 (正面) : 第八圖 心腹に敵の方を眼  
↓ 注ぎ分油の断なきを示す



第二本 (右敵)

意義 行進中右方より不意に迫り来る敵に對し  
先づ横薙ぎに之を斬り、續いて其の敵の後退  
するを追込みて正面を斬る。

動作及説明 一 左足より前進して、四歩目の  
右足を出すと共に右方の敵に對し、拔刀準備  
をなし、第一圖、五歩目の左足を左前に、足尖を内にして一步踏み開きつゝ、拔刀し、第二圖、刀尖  
を略と乳の高さに水平に横に薙ぐ、(敵拔刀せんとして右手を刀柄に懸けたる其の上膊部を、胸部  
諸共に斬りたるものと設想す)。  
此の際體は斬り開きつゝ、左腰及左肩を固定して胸を十分に張り、同時に右足尖を内にして、右方  
に僅かに(約一足長)踏み出す(第三、四圖)。

- 二 後退する敵を左足より二歩追込んで、其の正面を斬る(第一本二に同じ)。
- 三 残心を示し納刀す(第一本三、四に同じ)。



第二圖



第一圖 (備準刀拔) 註  
く向に方外りよ側外を刃刀

第三本 (左敵)

意義 行進中左方より不意に通り来る敵に對し先づ其の胸部を刺突し、續いて敵が拔刀しつゝ我が方に蹣跚めき来るを、右に體轉して斜に斬る(袈裟斬)。

動作及説明 一 左足より前進して、三步目の左足を出すと共に、左方の敵に對し、拔刀準備をなし、第一圖、四歩目の右足を右前に、足尖を内にして一步踏み開きつゝ、拔刀し(第二・三圖)、直ちに敵の胸部を刺突す(敵拔刀の中途にありしを刺突せしものと設想す)、此の際體は刺突しつゝ左正面に向け、同時に左足尖を同方向に向けて僅かに(約一足長)踏出す(第四・五圖)。

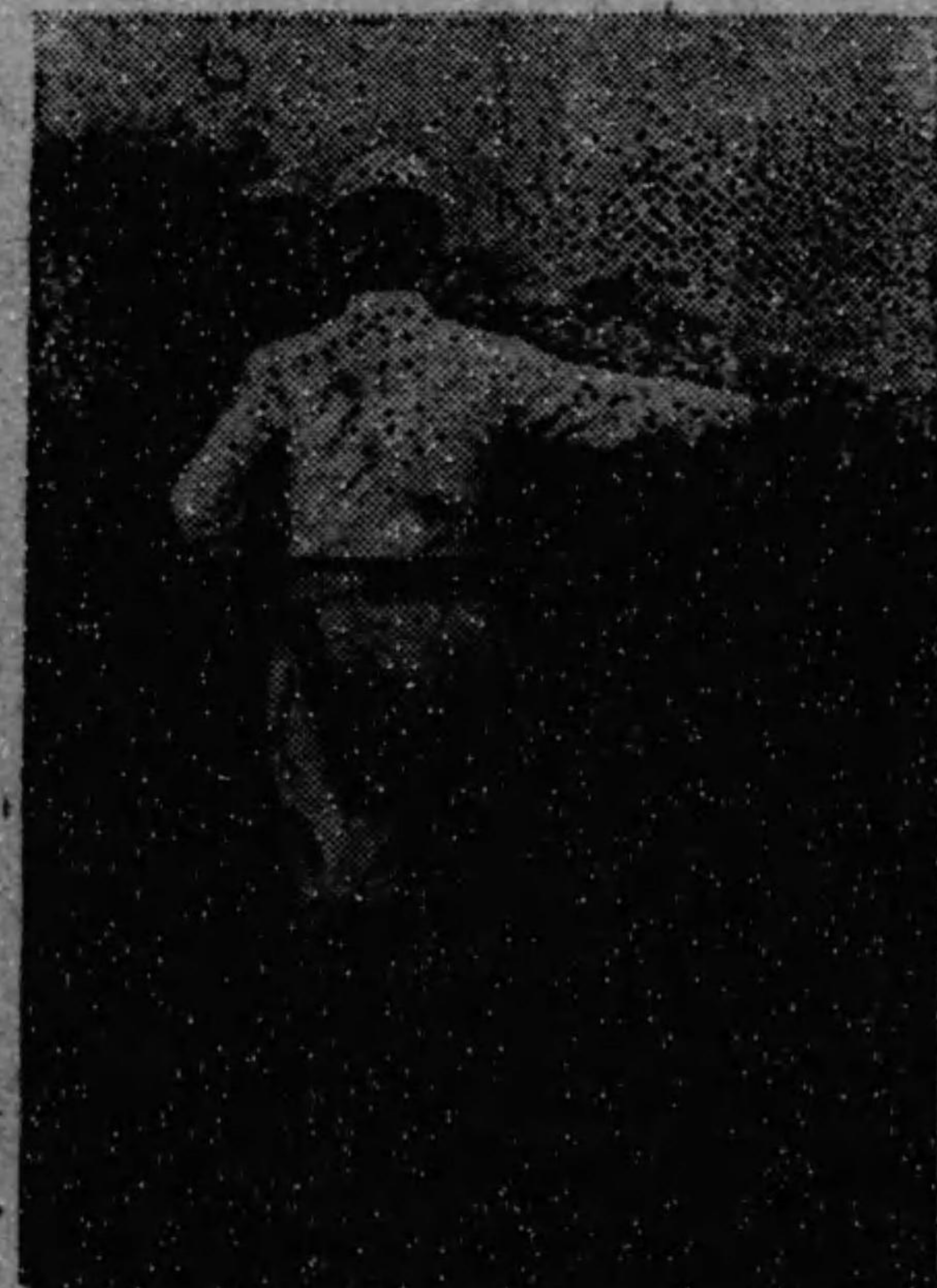


第二圖 ↑



第一圖 ↑ (備準刀拔) 註  
く向に方外りよ側外を刃刀

第四圖 (圖例) ↓



第三圖 ↓ (圖背)



第八圖



第七圖

一 刺突するや直ちに刀を引抜き、我が方に  
 踏蹴めき来る敵に對し右足を左足の右方に踏  
 み開きつゝ刀を前に出して敵の斬り下す刀を  
 左へ受け流し、第六圖、左斜後方に正對して、  
 兩手にて刀を頭上に振り被り（第七圖、左足  
 を右足の後方へ引くと共に、此の敵を右より  
 斜に斬る（袈裟斬）（第八圖、其の角度は三十  
 度乃至四十度を適度とす。  
 三 殘心を示し納刀す（第一本三、四に同じ）。

第四本（後敵）

意義 行進中後方より不意に逼り来る敵に對し  
 先づ之を抜打斜に斬り、續いて其の敵の後退  
 するを追込みて正面を斬る。  
 動作及説明 一 左足より前進して、四歩目の



第四圖↑ 刀を右方に（面側）むしは向



第三圖↑ （面正）

第六圖↓



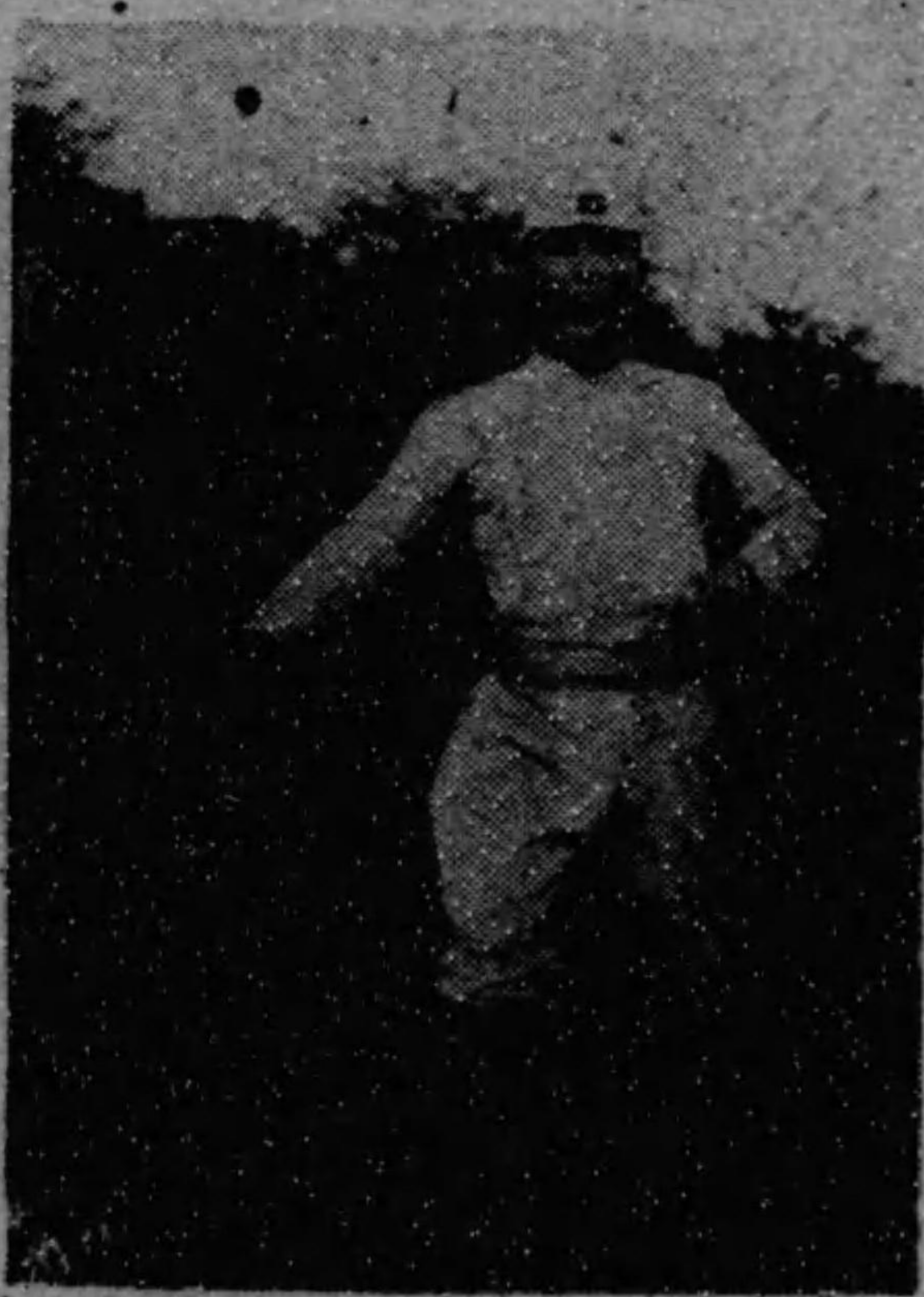
第五圖↓ （面正）



（面背）圖四第↑  
り斬りよ方上左に將き向に方後 註  
すとんげさ下  
圖六第↓



圖三第↑  
（面側）圖五第  
す下り斬に下右りよ方上左 註↓



圖二第  
く拔りよ方上左、つき向に方後註



（備準刀拔）圖一第註  
く向に側外に僅を双刀

右足を出すと共に、後方の敵に對し拔刀準備をなし（第一圖、五歩目の左足を右足の前に足尖を内にして一步出し、兩足尖にて右旋回して體を後方に向けつゝ拔刀し（第二圖、左上方より右下方に向ひ斜に大圓弧を描く如く斬り下す（敵我を斬らんとして刀を振り被れる右上臍部を、胸部諸共斬りたるものと設想す）（第三・四・五圖）。

此の際體は斬下しつゝ後方正面に向け同時に右足尖を同方面に向けて僅に踏出す。  
二 後退する敵を左足より二歩追込んで其の正面を斬る（第一本二に同じ）。  
追込む際の刀の振り被り方は右拳を外方より廻して頭上に振り被ると共に左手を側方より舉げて刀柄を握る（第六・七圖）。



（面正）圖七第↑  
（面側）圖八第  
るげ下り斬てみ込追 註↓



三、残心を示し納刀す（第二本三、四に同じ）。

第五本（突撃）

意義 前方の數敵に對し突入し、逐次之を斜に斬り斃し、最後に逃走する敵を追及しつゝ其の頭部を斬る。

動作及説明 一、前方に突入の餘地を存する如く、適宜後方（六歩乃至八歩を適當とす）に位置し



圖一第 一 圖二第 二

て抜刀し肩刀をなす（第一圖）。

二、前方の敵に對し、早駆を以て發進すると同時に、刀を片手上段に振り被る（第二・三圖）。

三、數歩前進し、左足（五歩目若くは七歩目を適當とす）を踏み出しつゝ、左手を刀柄に添へて握り、右足を出すと共に（第四圖）正面の第一敵を右より斜に斬る（第五圖）。

四、拳を外方より廻して刀を左肩の上に振り被り（第六・七圖）、左足を右足の前に、足尖を僅かに内にして一步踏み出しつゝ、右前の第二敵を左より斜に斬る（第八圖）。

五、刀を其の餘勢を利用して右肩の上に振り被り（第九・十圖）、右足を左足の前に足尖を僅かに内にして一步踏み出すと同時に左前の第三敵を右より斜に斬る（第十一圖）。





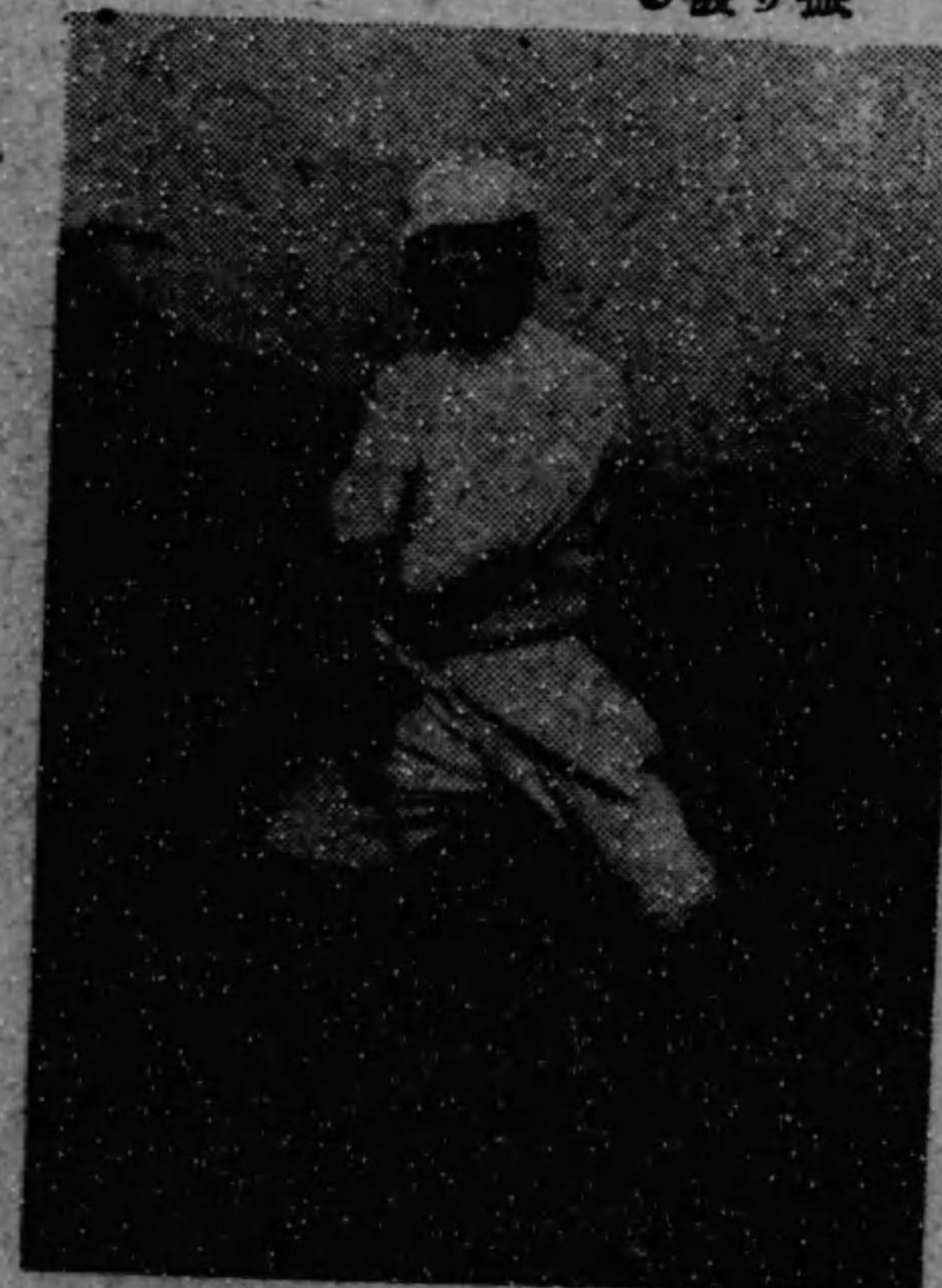
圖三第↑

変るたり斬に斜り上右 圖五第↓  
す止時は時斬勢



圖四第↑  
てに手兩を刀し出を足右 勢変るすとんら斬に將り被振

に肩左てし廻に方外を拳 圖六第↓  
る被り振



圖七第



圖八第

六 更に刀を其の餘勢を利用して頭上に振り被

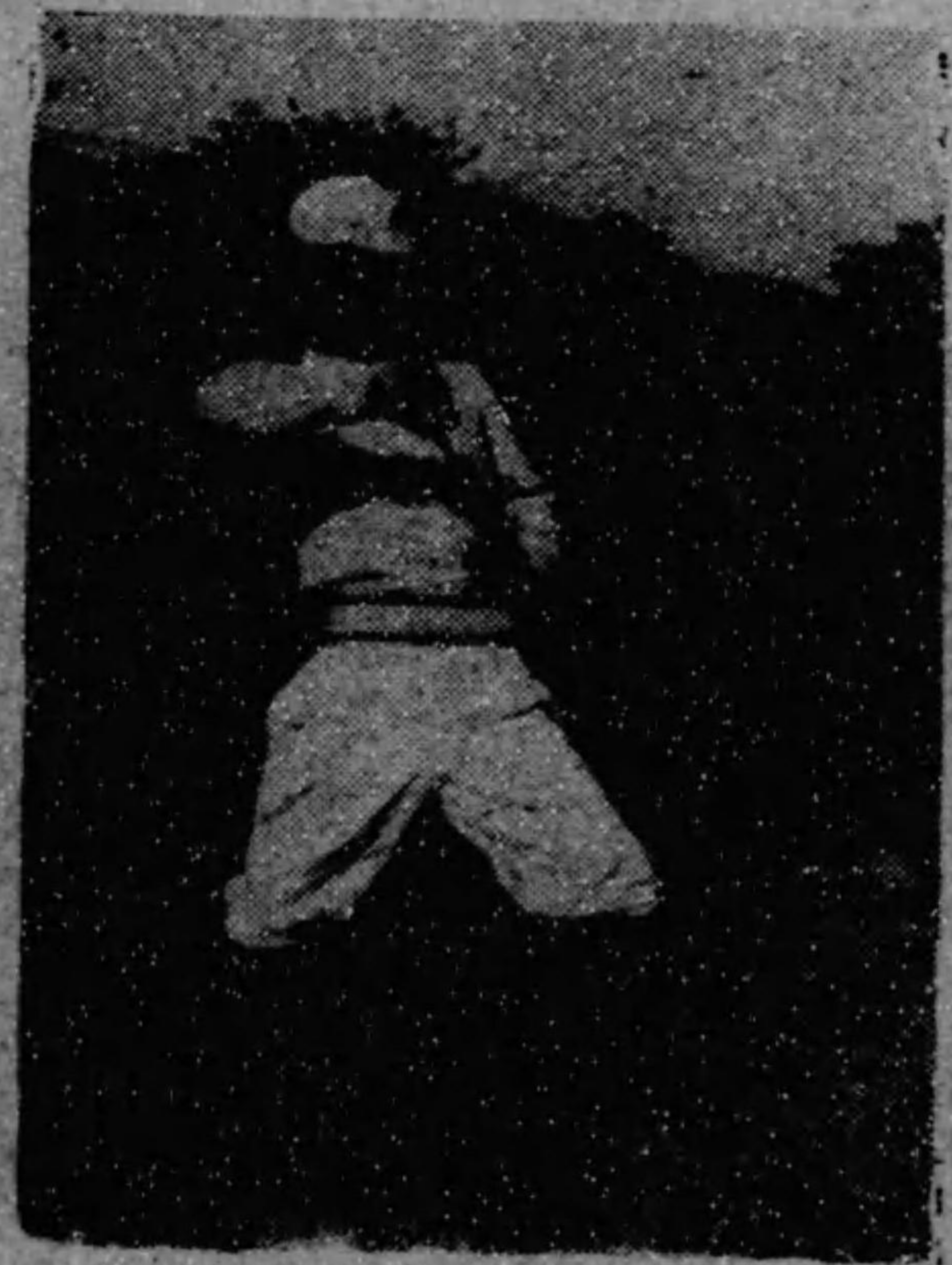
りつゝ體を正面に向け逃走する第四敵に對し  
左足を前に出し(第十二圖)、直ちに其の足に  
て踏み切り、基本動作面の斬撃の要領にて真  
直に斬る、第十三圖。

斬撃後は、斬撃時の伸暢せる姿勢を保ちつゝ、  
體の餘勢に伴ひ連續數回「前へ」をなしたる  
後停止するものとす。

七 殘心を示し納刀す(第一本三、四に同じ)。  
「注意」 第二敵乃至第四敵に對する斬撃動作  
は連續して實施し且努めて迅速なるを要す。

第六本 (前後敵)

意義 前方の敵に對し肉薄中、後方より不意に  
斬り懸る敵の刀を受流して之を斜に斬り、直



第一圖 第一節 劍に受て流す  
 第二圖 第二節 劍に受て流す  
 第三圖 第三節 劍に受て流す  
 第四圖 第四節 劍に受て流す  
 第五圖 第五節 劍に受て流す  
 第六圖 第六節 劍に受て流す  
 第七圖 第七節 劍に受て流す  
 第八圖 第八節 劍に受て流す  
 第九圖 第九節 劍に受て流す  
 第十圖 第十節 劍に受て流す  
 第十一圖 第十一節 劍に受て流す  
 第十二圖 第十二節 劍に受て流す  
 第十三圖 第十三節 劍に受て流す  
 第十四圖 第十四節 劍に受て流す  
 第十五圖 第十五節 劍に受て流す  
 第十六圖 第十六節 劍に受て流す  
 第十七圖 第十七節 劍に受て流す  
 第十八圖 第十八節 劍に受て流す  
 第十九圖 第十九節 劍に受て流す  
 第二十圖 第二十節 劍に受て流す  
 第二十一圖 第二十一節 劍に受て流す  
 第二十二圖 第二十二節 劍に受て流す  
 第二十三圖 第二十三節 劍に受て流す  
 第二十四圖 第二十四節 劍に受て流す  
 第二十五圖 第二十五節 劍に受て流す  
 第二十六圖 第二十六節 劍に受て流す  
 第二十七圖 第二十七節 劍に受て流す  
 第二十八圖 第二十八節 劍に受て流す  
 第二十九圖 第二十九節 劍に受て流す  
 第三十圖 第三十節 劍に受て流す  
 第三十一圖 第三十一節 劍に受て流す  
 第三十二圖 第三十二節 劍に受て流す  
 第三十三圖 第三十三節 劍に受て流す  
 第三十四圖 第三十四節 劍に受て流す  
 第三十五圖 第三十五節 劍に受て流す  
 第三十六圖 第三十六節 劍に受て流す  
 第三十七圖 第三十七節 劍に受て流す  
 第三十八圖 第三十八節 劍に受て流す  
 第三十九圖 第三十九節 劍に受て流す  
 第四十圖 第四十節 劍に受て流す  
 第四十一圖 第四十一節 劍に受て流す  
 第四十二圖 第四十二節 劍に受て流す  
 第四十三圖 第四十三節 劍に受て流す  
 第四十四圖 第四十四節 劍に受て流す  
 第四十五圖 第四十五節 劍に受て流す  
 第四十六圖 第四十六節 劍に受て流す  
 第四十七圖 第四十七節 劍に受て流す  
 第四十八圖 第四十八節 劍に受て流す  
 第四十九圖 第四十九節 劍に受て流す  
 第五十圖 第五十節 劍に受て流す  
 第五十一圖 第五十一節 劍に受て流す  
 第五十二圖 第五十二節 劍に受て流す  
 第五十三圖 第五十三節 劍に受て流す  
 第五十四圖 第五十四節 劍に受て流す  
 第五十五圖 第五十五節 劍に受て流す  
 第五十六圖 第五十六節 劍に受て流す  
 第五十七圖 第五十七節 劍に受て流す  
 第五十八圖 第五十八節 劍に受て流す  
 第五十九圖 第五十九節 劍に受て流す  
 第六十圖 第六十節 劍に受て流す  
 第六十一圖 第六十一節 劍に受て流す  
 第六十二圖 第六十二節 劍に受て流す  
 第六十三圖 第六十三節 劍に受て流す  
 第六十四圖 第六十四節 劍に受て流す  
 第六十五圖 第六十五節 劍に受て流す  
 第六十六圖 第六十六節 劍に受て流す  
 第六十七圖 第六十七節 劍に受て流す  
 第六十八圖 第六十八節 劍に受て流す  
 第六十九圖 第六十九節 劍に受て流す  
 第七十圖 第七十節 劍に受て流す  
 第七十一圖 第七十一節 劍に受て流す  
 第七十二圖 第七十二節 劍に受て流す  
 第七十三圖 第七十三節 劍に受て流す  
 第七十四圖 第七十四節 劍に受て流す  
 第七十五圖 第七十五節 劍に受て流す  
 第七十六圖 第七十六節 劍に受て流す  
 第七十七圖 第七十七節 劍に受て流す  
 第七十八圖 第七十八節 劍に受て流す  
 第七十九圖 第七十九節 劍に受て流す  
 第八十圖 第八十節 劍に受て流す  
 第八十一圖 第八十一節 劍に受て流す  
 第八十二圖 第八十二節 劍に受て流す  
 第八十三圖 第八十三節 劍に受て流す  
 第八十四圖 第八十四節 劍に受て流す  
 第八十五圖 第八十五節 劍に受て流す  
 第八十六圖 第八十六節 劍に受て流す  
 第八十七圖 第八十七節 劍に受て流す  
 第八十八圖 第八十八節 劍に受て流す  
 第八十九圖 第八十九節 劍に受て流す  
 第九十圖 第九十節 劍に受て流す  
 第九十一圖 第九十一節 劍に受て流す  
 第九十二圖 第九十二節 劍に受て流す  
 第九十三圖 第九十三節 劍に受て流す  
 第九十四圖 第九十四節 劍に受て流す  
 第九十五圖 第九十五節 劍に受て流す  
 第九十六圖 第九十六節 劍に受て流す  
 第九十七圖 第九十七節 劍に受て流す  
 第九十八圖 第九十八節 劍に受て流す  
 第九十九圖 第九十九節 劍に受て流す  
 第一百圖 第一百節 劍に受て流す

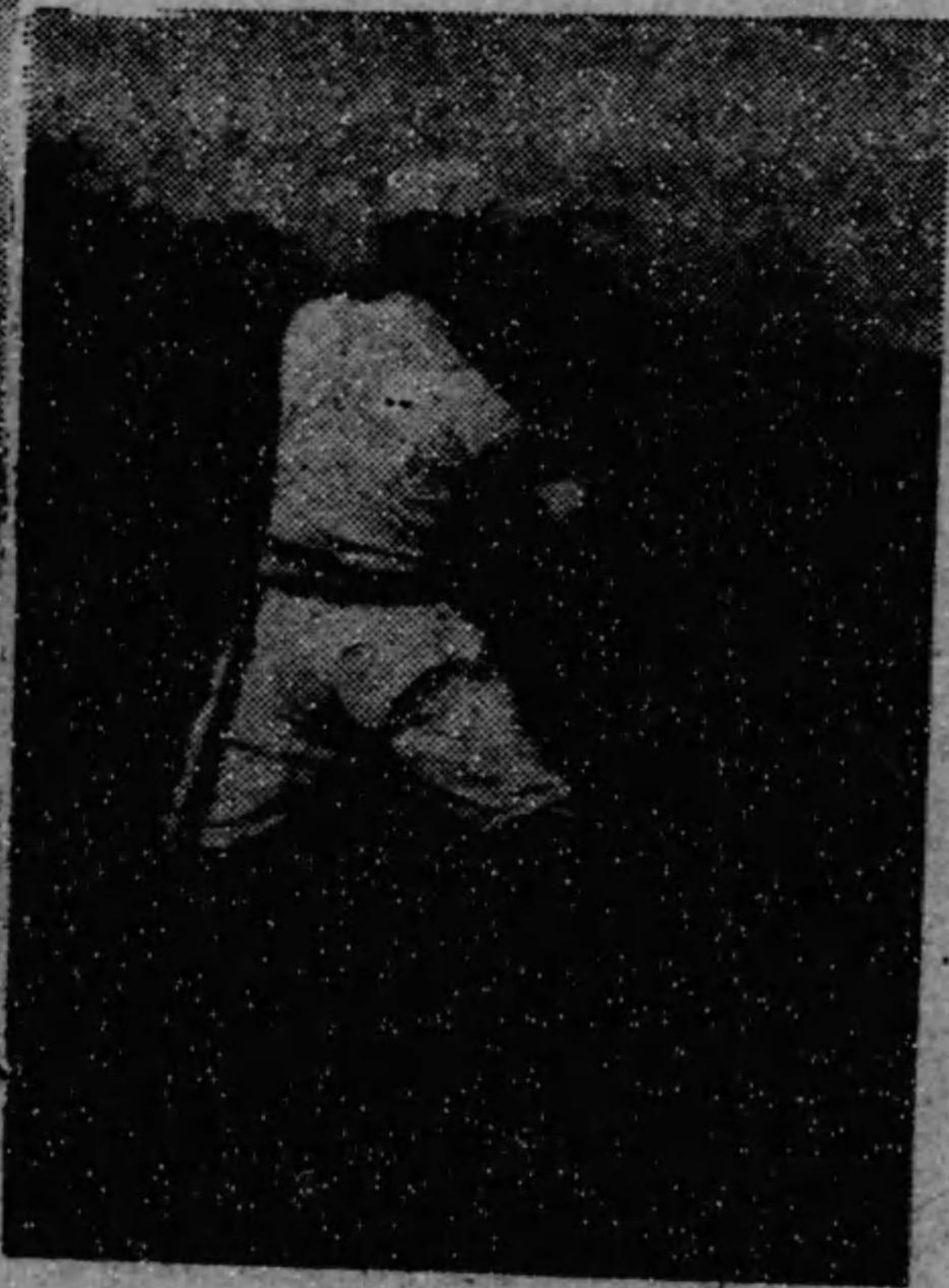


第三十圖

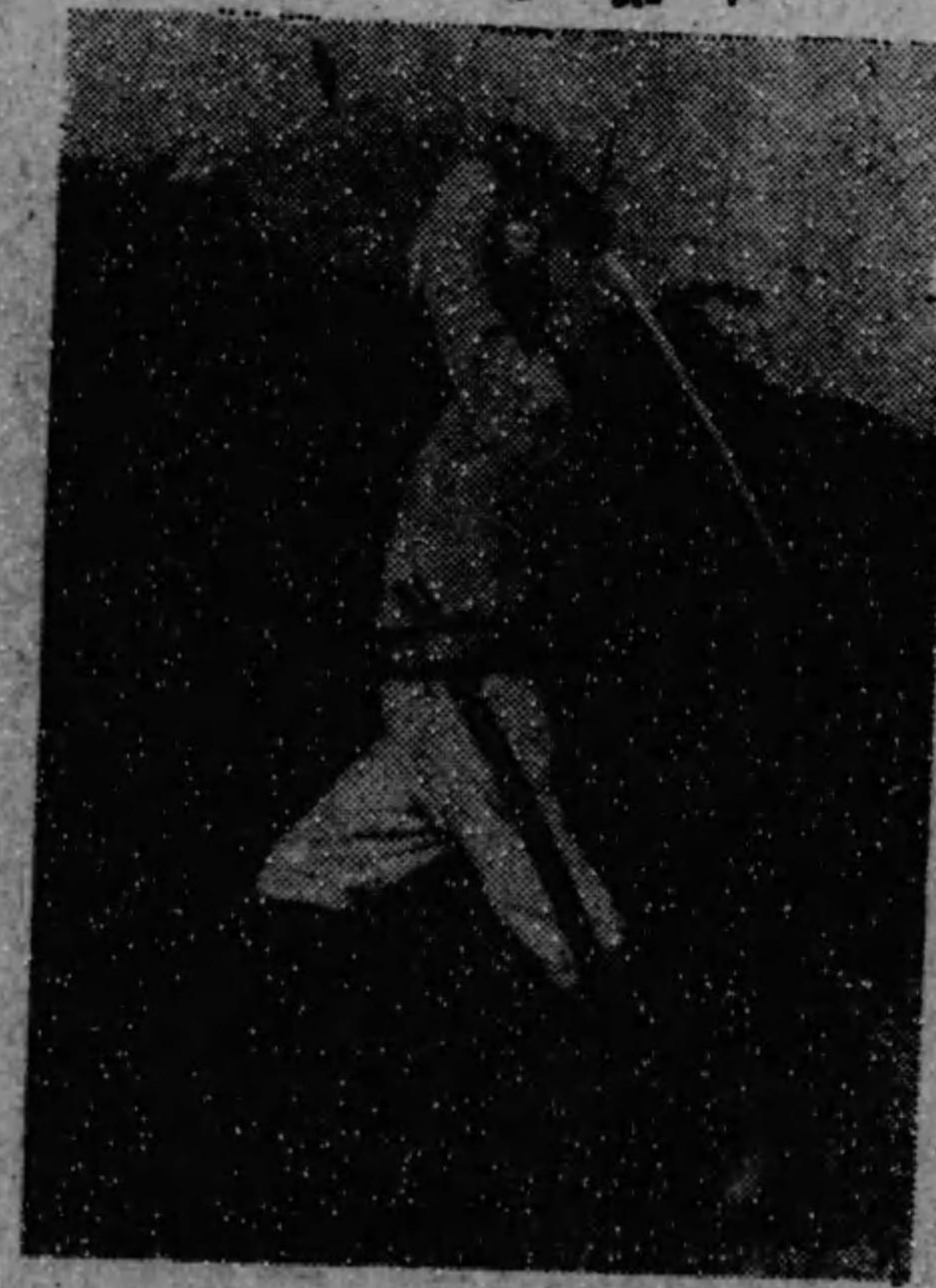
ちて舊前方の敵に正對し其の正面を斬る。  
 動作及説明 一 前方の敵に對し拔刀準備を  
 なしつゝ左足より稍々速度を速めて前進中  
 後方の敵不意に斬り懸りたるに對し、右足  
 (四歩目を可とす)を左足の前に足尖を内に  
 して二歩踏み出すと共に體を左後方に向け  
 つゝ拔刀し、第一圖、刀を右片手にて頭の  
 前上方に翳して後方より眞直に斬り下す敵  
 の刀を左方に受け流す(第二圖)。  
 二 敵の刀を受け流すや、直ちに右足を左足  
 の右方に踏み開き、斜左後方に正對しつゝ  
 刀を兩手にて頭上に振り被り(第三圖)、該  
 敵を右より斜に斬る(第四圖)。  
 三 兩足尖にて左旋回して舊前方に正對しつ  
 づ刀を頭上に振り被り(第五圖)、直ちに該



第十圖



第九圖



第二十圖



第十七圖



(圖例) 圖二第↑



圖三第↑

踏へ方後の足右を足左 圖五第↓  
す下り斬いつき開み



圖四第↓



(4)



(圖例) 圖六第

方向の正面を斬る(第六圖)。

四 右足を左足の前に出し構備の姿勢を取りつゝ、  
残心を示し納刀す。

**第七本 (左右敵)**

意 左右より逼り来る敵に對し、先づ右の敵を  
抜打斜に斬り、續いて左の敵を兩手にて斜  
に斬りたる後更に追込んで刺突す。

動作及説明 一 左右の敵に對し頭を正面にしたる儘抜刀準備をなしたる後、先づ右敵に對し注目し、左足を右足の右方に足尖を外にして約半歩踏み出しつゝ、抜刀し、更に右足を一步其の右に足尖を内に向けて踏み出すと同時に、該敵を左より斜に斬る(第二・三圖)。

二 刀を其餘勢を利用して兩手にて頭上に振り被りつゝ、兩足尖にて左旋回し、左正面に正對し(第三圖)、右足を該方向に一步踏み出すと同時に、左の敵を右より斜に斬る(敵我を斬らんとし、刀を上段に振り被れる其の左上臍部を胸部諸共斬るものと設想す)(第四圖)。  
「注意」 一、二の動作は連続し且努めて迅速なるを要す。



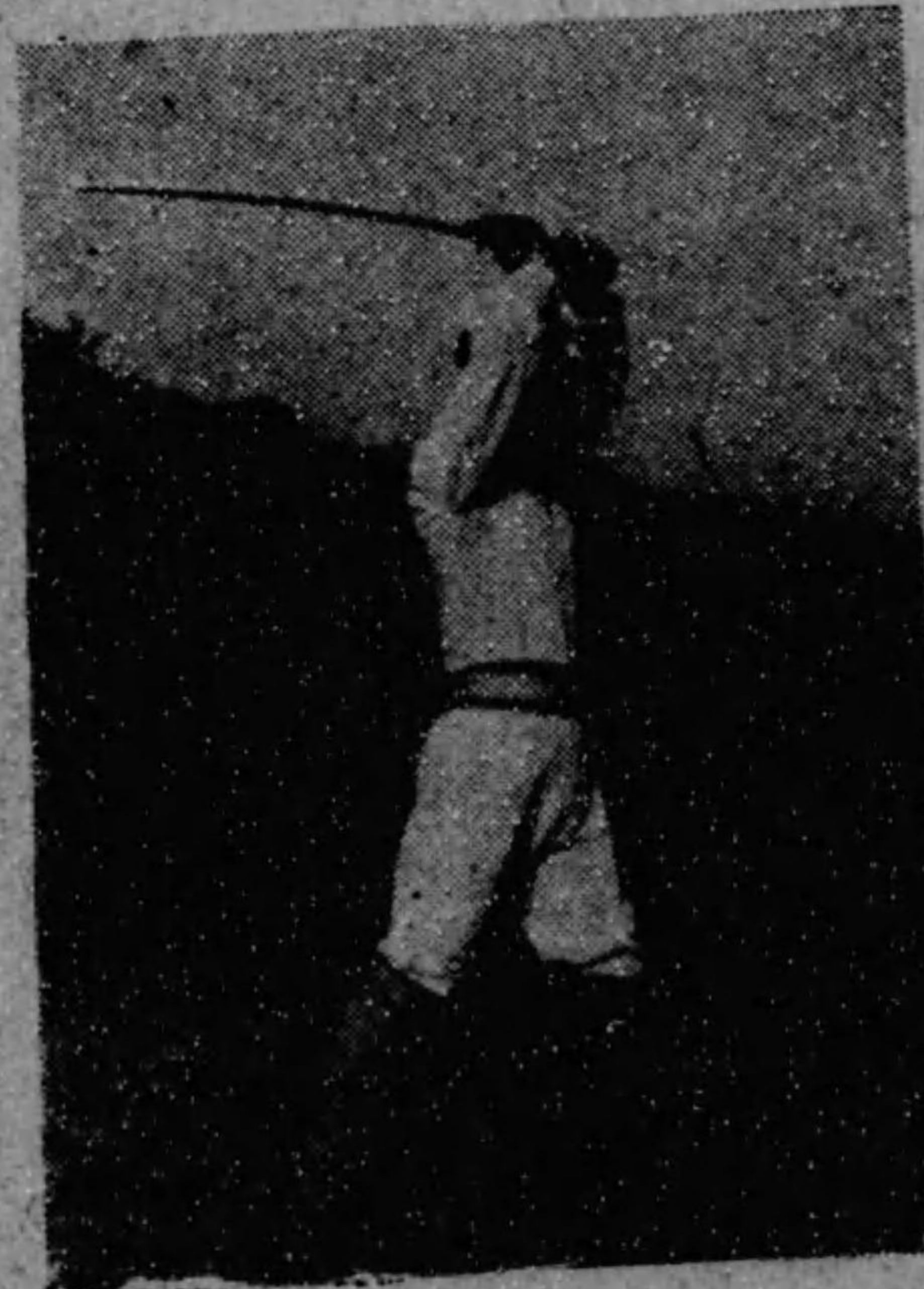
圖六第↑

(面側) 圖八第↓



基準に突刺の作動本基 圖五第↑

圖七第↓

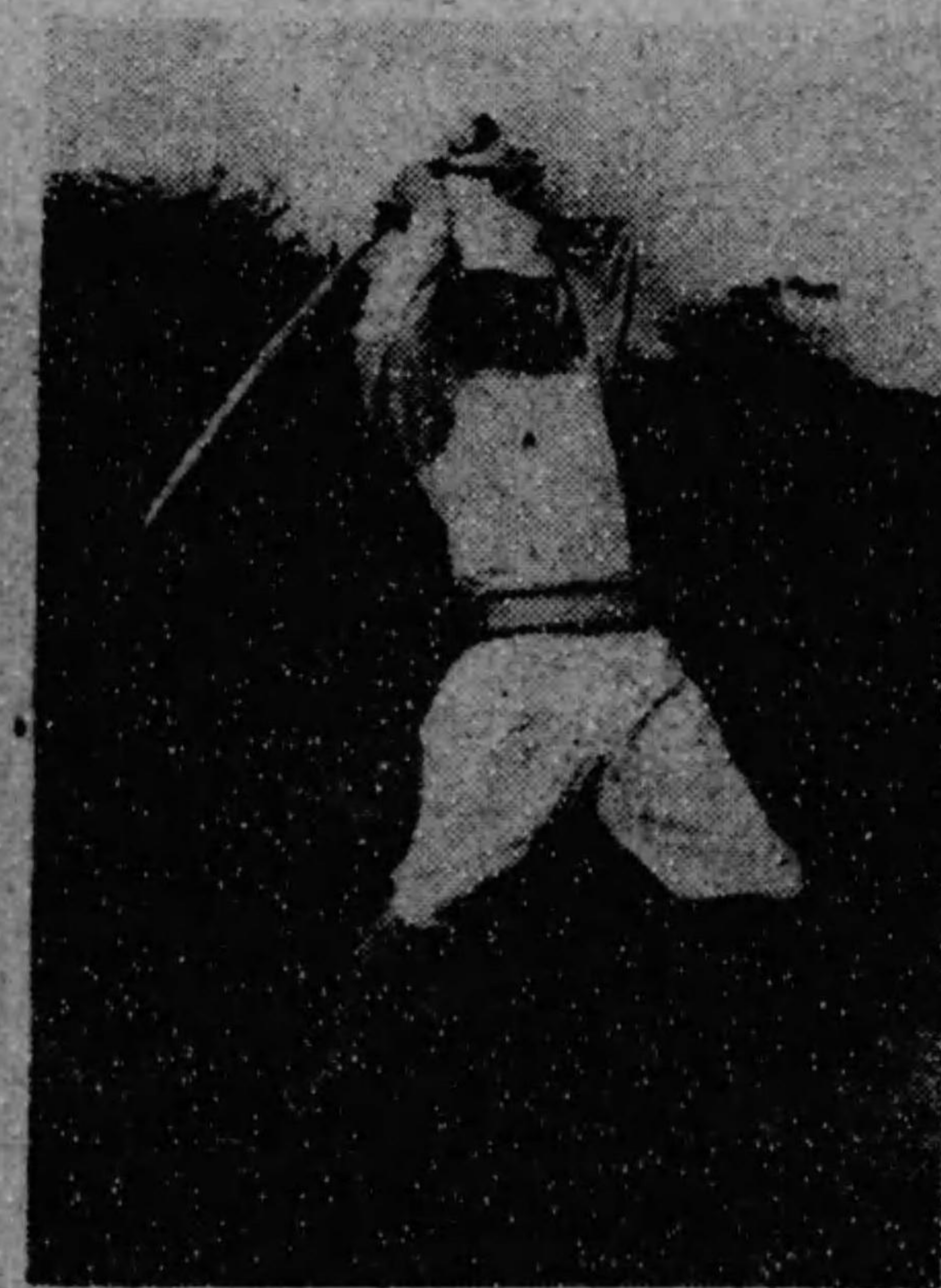


(面側) 圖二第↑

圖四第↓



圖一第↑  
すに側外と稍を双刀 註  
圖三第↓



- 三 後退する敵を、左足より二歩追込みて、(一步目に刺突の構をなす) (第五圖) 其の胸部を刺突す (第六圖)。
- 四 僅に後退しつゝ刀を引抜き(第七圖)、續いて徐ろに左上段(左足を前に出す)に構へて残心を示す(第八圖)。
- 五 右足を基準にして残心を繼續しつゝ徐ろに構備の姿勢を取る。
- 六 納刀す(第一本四に同じ)。

軍刀の操法(終)

試斬

- 一 試斬の必要……………(四八)
- 二 試斬の目的……………(四九)
- 三 實施法の概要
  - 1. 斬撃要領、特に奥旨の修得……………(四九)
  - 2. 刀の取扱に慣熟すること……………(五〇)
  - 3. 氣魄の充實……………(五〇)
  - 4. 斬撃部位……………(五〇)
- 四 實施要領……………(五三)
  - 一、刀の抜き方……………(五三)
  - 二、刀の持ち方……………(五三)
- 三、斬撃刺突の方法
  - 1. 眞直斬
    - イ、正面据物斬……………(五三)
    - ロ、乘馬片手軍刀術、片手斬……………(六三)
  - 2. 刺突……………(六四)
  - 3. 斜斬……………(六八)
  - 4. 特殊の訓練……………(七二)
- 五 實施上の注意……………(七五)
- 六 刀の準備及手入……………(七七)
- 七 試斬に使用する資材……………(八〇)

## 試 斬

一 試斬の必要 軍刀術は對手を設けて演練する必要あり、其修練の特徴は敵の我が虚隙に乗じ殺到せんとするに先だち、絶えず機先を制し、己を棄て、攻撃し、一斬突を以て其の死命を制するにあり。然りと雖も其の所持する所の武器は軍刀と異なる竹刀にして其の斬突も防具を裝著せる部位に限定し、而も外傷せしめざる程度の撃突を加ふるに止り、實戦の様相とは稍と隔りあり、歴戦者の體驗に依れば、平素競點的試合に墮したる者は、相當の自信を有せしに拘らず、軍刀を振ひて十分に其の成果を擧げ得ざりし者亦尠からざりしと。蓋し軍刀は、其重量、長さ、構造、重心位置等に於て竹刀と異なるのみならず、其の用法に於ても刃筋、速度、力の方向、肉體に斬り込む氣持、突き刺す氣持等に於て差異あり、竹刀のみの稽古に於ては此等を明確に會得し、修練し得ざるを一般とす。彼の一般劍道に用ふる程度の臂力にて軍刀を操用せんか、僅かに敵の被服を裂き、皮膚を傷くる程度の効果を得るに止るを以て、眞に敵に對し一刀兩斷的效果を得んと欲せば其の實施要領に於て更に一段の工夫を要するものあり。

軍刀の操法（所謂居合、抜刀術等）は實員、實物を相手とすることなく、自己反省を行ひつゝ、練習を重ね劍術目的達成の一助となすに效果極めて大なりと雖も尙被切斷物に對し斬り込み、突き刺

す等の如き實感を體得し得ざる憾みあり。

試斬は軍刀を持ちて實際に被切斷物を斬撃刺突し、眞に掌中の作用及斬撃刺突の感覺及其の實施要領を體得して自己の伎倆と己の軍刀とに對し自信と信頼とを抱かしむる效果大なるものあり。

二 試斬の目的 實物に對する斬突を行ふ際の下腹部の充實、軍刀の握り締め、臂力の用法、刀尖、刀刃の方向等を會得し自己の伎倆に對する自信力を得しめ又軍刀の斬味、抗堪力を試し、自己の軍刀に對する信頼の度を深め以て如實に格闘に於ける必勝の確信を得しむるにあり（劍術教範第三十六參照）。

### 三 實施法の概要 一、斬突要領、特に奥旨の修得

#### 1. 力の方向と刃筋の一致

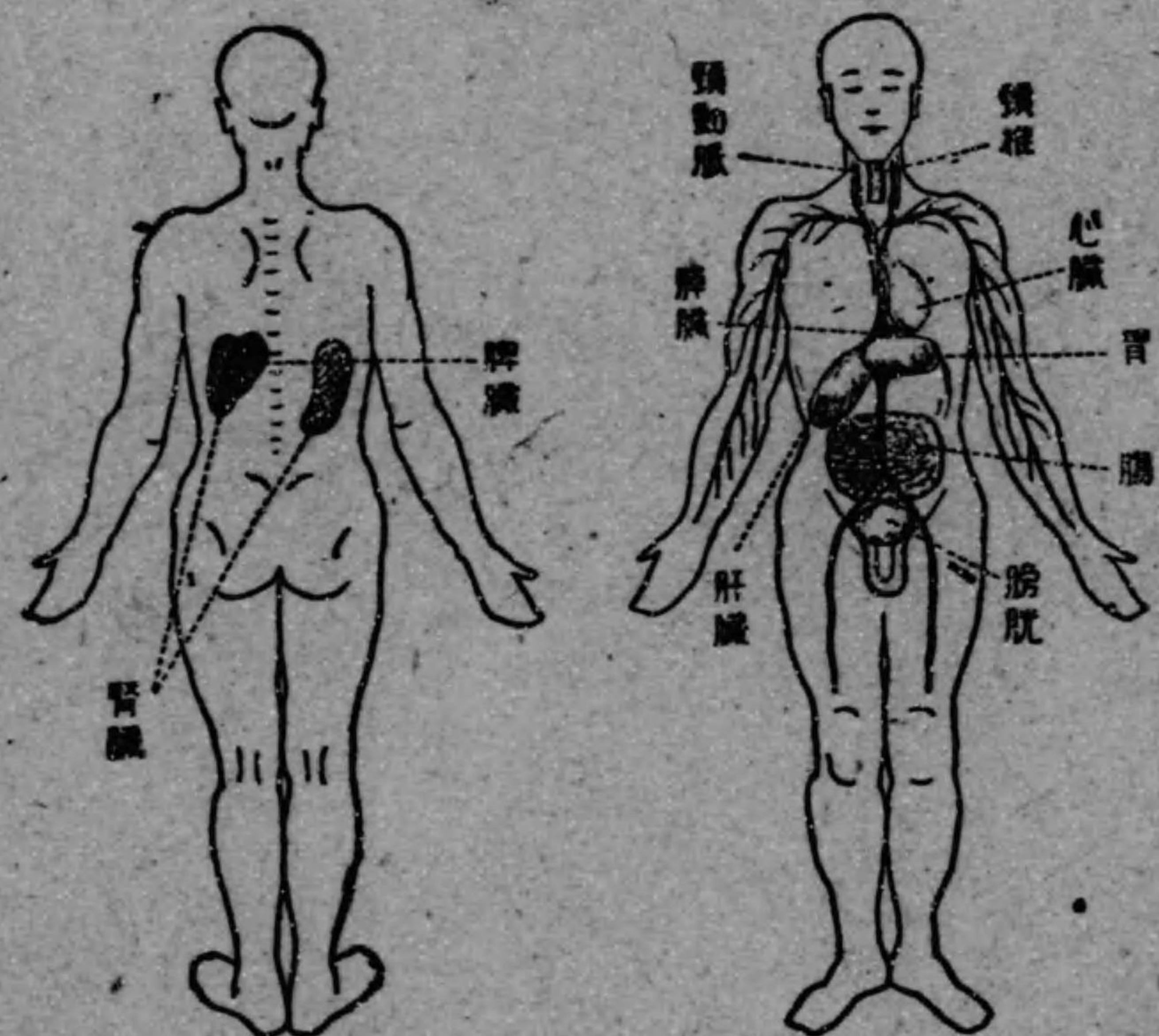
足の開き、兩手の握り締め、臂力の用法等が刃筋を正しむる上に影響する事極めて大なるを以て、斬突方向の異なるに伴ひ、如何にすべきかを體得するを要す。

一例を示せば左手正しくとも、眞直に振り被りし際、右手右に偏せば、斬撃方向左に偏し、斬撃途中右手に力を入れ過ぐるや左に傾き、右手の握り締め弛めば右に傾くが如し。

#### 2. 斬突量を大にすること

斬突量を大ならしむる爲には、兩臂の運動量を大にし、斬る爲には振り被りたる力を利用して斬

合場ノ擊斬



り下ろすこと其の力の用法は遠心力を利用し、單に臂力のみならず、下腹部の力即ち脚・腰の力を利用し、更に氣力を加へ刀尖に迄及ぼさしむること切要なり。

二、刀取扱法の慣熟

刀の抜き方、納め方、握り方、足の踏み方、歩法、斬突法、刀の受授法等を會得し自他共に不注意に依る危害を絶無ならしむると共に刀の手入れ取扱法を會得し、刀の損傷を豫防し不安なく又虚隙なく、刀を取扱ふこと必要なり。

三、氣魄の充實

目的物は一太刀（一斬撃一刺突）にて寸毫も餘さざる如く斬撃刺突せざれば己まざるの氣魄を充實し全力を集中す、然らざれば雷に刃筋を不正にして斬突量を減少するのみならず、時として不慮の危害を生ずることあり。

四、斬突部位

實戰に方り身體の何れの部位を斬突すべきかは、敵の状態（抵抗の有無、姿勢、服装、武装等）地形状況の緩急等に依り差異ありと雖も一般的に之を觀察せば左の如し。

1. 醫學上の致命傷

イ、斬る場合（左圖参照）

首—頸髓を切断すれば即死す。

内外頸脈を切断すれば即死す（兩側表面下約二種の部位に在り）。

頭—腦髓に達すれば即死す、腦髓に達せざるも腦震盪に因り即死することあり。

胸部重要臓器—心臟上行大動脈、肺動脈を切断すれば即死す。

腹部重要臓器—肝臓、胃腸、腹部、大動脈、膀胱、膀胱、腎臓等を切断すれば即死せざる場合と雖も必ず死に到る。

上下肢—出血多量なれば死に到る。

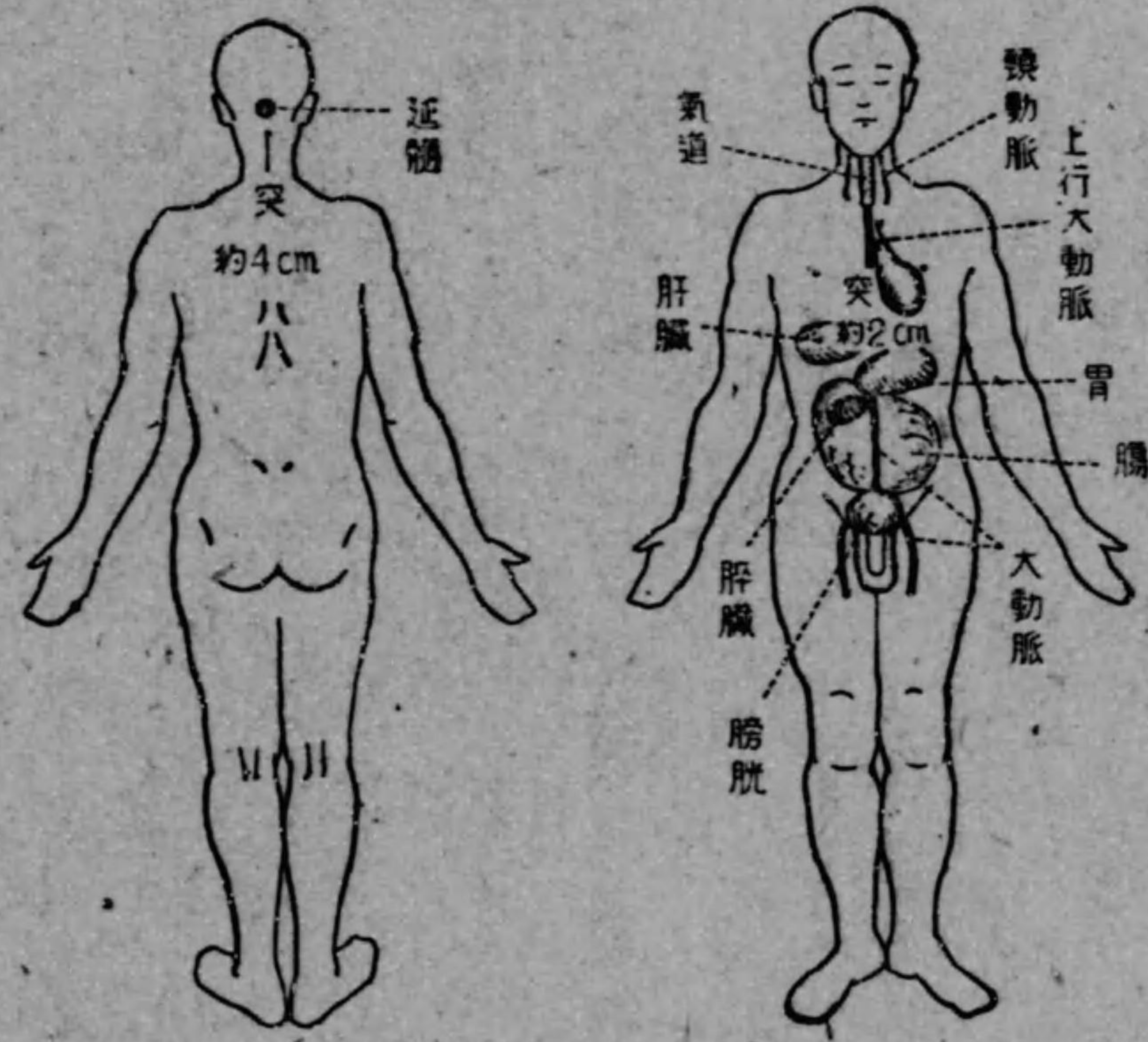
■、突く場合（上圖参照）

喉—氣道、頸動脈

頭部特に延髓

胸部—心臟、肝臓、上行大動脈

合場ノ突刺



腹部—胃腸、腹部、大動脈、脾臓、膀胱

2. 斬突成果方面よりの觀察

イ、斬る場合

首

左肩部よりの袈裟斬

頭部 但し鐵兜を冠りたる場合を除く

顔面

ロ、突く場合

左胸部

腹部

首

顔面

已むを得ざる場合には先づ身體何れの部位を問はず負傷せしめて敵の抵抗又は運動を拘束せしめ機を失せず重要部位を斬突するを可とす。

四 實施要領 試斬試突の練習の爲には全般に互り、先づ刀の抜き方、持ち方を會得せしめ、次

で其の場にて眞直に斬撃、刺突する要領及斜下方に斬撃する要領を修得す。

本稿に明記しあらざる事項は凡て劍術教範及刀の操法に準據するものとす。

一、刀の抜き方

1. 鯉口に近く鞘を握る (止圖参照)

上圖の如く左手を以て刀の入るべき鯉口の部分を拇指と食指との附根部の溝に接著する如く鯉口の頭部を若干引込め、左手の皮膚が出でざる如く握り、再び移動すべからず、時として左手拇指又は食指と拇指との間の部位を傷つることあり。



2. 右手を以て刀を抜く

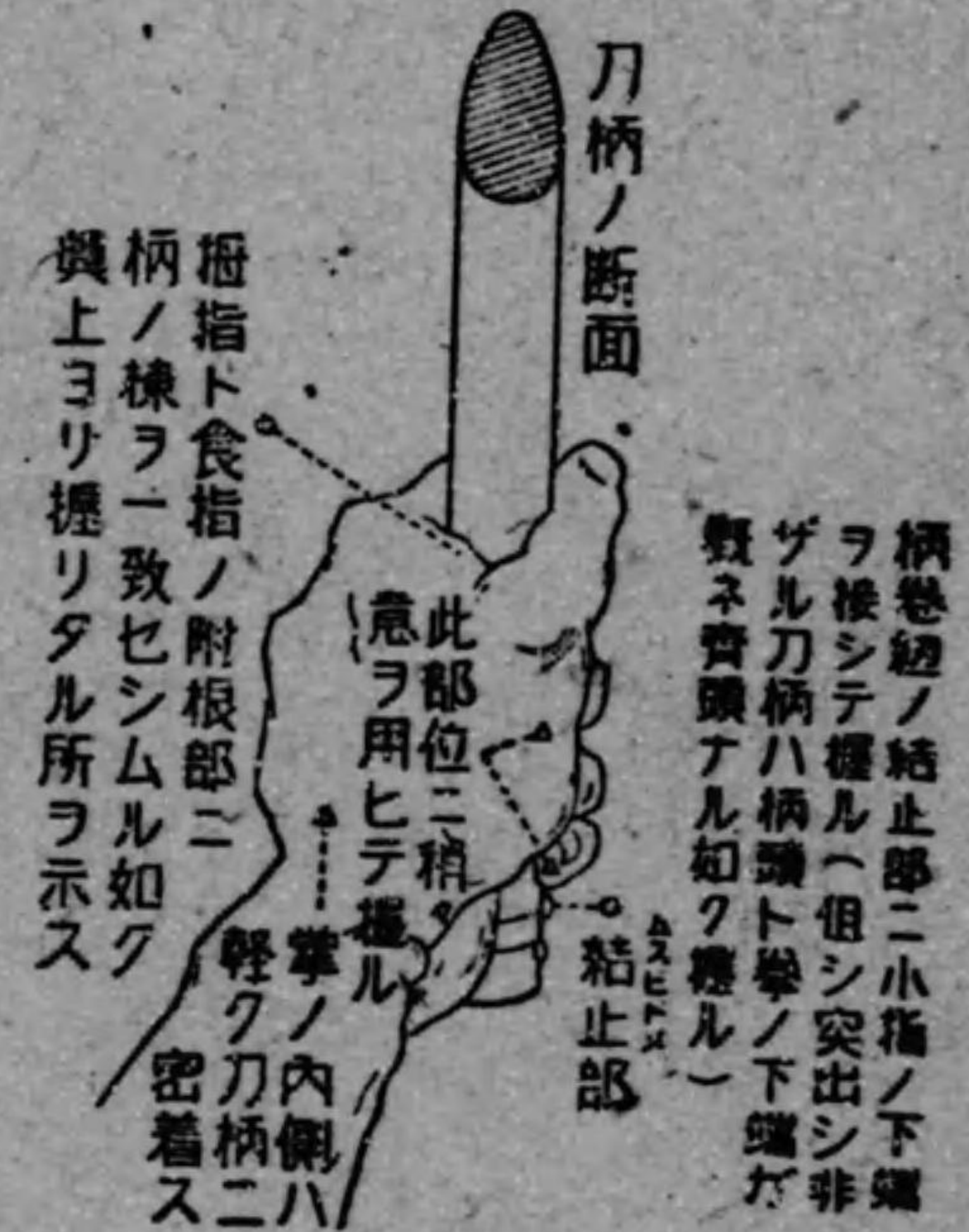
自分の身體又は他物に刀刃の觸れざる如く注意して抜き放つと共に、刀刃を以て鞘を擦らざる如く徐ろに抜き放つ。但し抜打ち動作は此の限にあらす。

二、刀の持ち方

1. 刀柄の持ち方



刀柄ノ断面



より體得せしむるを可とす。

2. 其の他 單に手先にて握ることなく心氣を丹田に收めて握ること、臂、兩肘共に故らに張ることなく自然に保つこと等其の他劍術實施の要領に準ず。

三、斬撃刺突の方法

1. 眞直斬

イ、正面据物斬

實施の順序として被切斷物を使用することなく刀(又は木刀)を用ひて、空間に於て被切斷物

イ、左手の握り方(圖示)

口、右手の握り方 右手は鐔に近く軽く刀柄の上方より握る其の掌中の要領左手に同じ。

ハ、兩手の關係 兩手の握り心地は刀の重量及調子に適合する如き力を以て、強からず、弱からず、中庸を得ること肝要なり。又左右の握り方を均しくし差異あるべからず、指導者は初歩者の手を握り實感に

に對すると同一の姿勢及方法にて斬撃する要領を體驗し、次で据物斬を體驗するを可とす。

(一)、斬撃要領の基礎的練習

○「足の開き」

劍術の構備姿勢の如く右(左)足を前に踏出して足を前後に構ふる方法を原則とす。

初歩者は左右約半歩踏開ける姿勢より入るを可とす。姿勢の如何を問はず兩足の踵を僅かに挙げ、膝の力を弛めて斬り下げたる瞬時全身の力の十分に入る如く準備し置くを要す。

前後、左右に開く場合、始の内は足幅を少しく大にするを可とす、これ往々初歩者にして自ら足又は膝に斬り込むことあればなり。

兩足の位置は等高にして滑ることなく安定よき位置を選定するを可とす、これ兩足の位置不安定なれば正しく且十分に斬撃し難きを以てなり。

○「體の構へ」

刀は僅かに前に出して斬らんとする部位を測定す。

兩膝を弛めて重心を稍と低下し、下腹部に力を充實し、體重を兩足に齊しくかけ、兩肩は凝らざる如く齊しく之を下げて兩肘を僅かに側方に張る如くす。

頭は正しく保ち、凝ることなく、斬らんとする部位に眼を注ぐ。

○「心の構へ」

眼を斬撃部位に注ぎ、心氣を臍下に收め、深呼吸を行ふこと數回、漸次氣力の充實を圖る。

○「斬撃」

氣力を充實せば、上體を稍と反身となし、踵を擧げ、一舉に大業にて刀を頭上大きく振り振り終らんとするや腰を下ぐると同時に電光石火の勢にて烈しく刃筋正しく斬り下す。

此の際兩臂は十分伸すと共に、兩掌を絞りつゝ兩手の小指の側に十分意を用ひて握りしめ、刀尖に力の籠る如く斬り下ぐ、斬り下ぐる程度は概ね膝頭の高さとする。

○「眼」

眼は刀を振り被り反身となるに伴ひ、斬撃部を離れ、上體及頭の運動に伴ひ、刀を斬り下ぐるに追従して自然に斬撃部を注視す。

斬撃間絶えず、斬撃部位を見んとせば、斬り方小業となり、斬撃量小となり又折角反身となり大業にて斬撃の準備をなすも刀を斬り下す前より過早に視線を斬撃部に移さば、肩部に震りを生じて斬撃量小となること多し。

○「大業」

大業ならざれば、斬撃量小となる。又振り上げたる力を利用して斬り下げざれば斬撃量小と

なる。されば十分其の要領を體得すべきなり、之が爲初歩者にありては、斬り下す前に斬撃部位を定め、緩徐に二、三回斬り下しの豫習を行ひ、拍子、調子を覺ゆるを可とす。

手の力のみならず、全身の力、特に腰の力にて斬撃するの著意必要なり。之が爲大業に振り上げたる時踵を擧げ、反身となり、刀は十分に振り被りて其の力を利用して又遠心力をも利用して斬下すと共に、膝を屈げ、腰を眞直に低下し且臍下丹田に力を充實し、刀尖に全力の集中する如く斬り下すを要す。

初歩者は概して掌中の作用の會得十分ならず、斬り下す際手首を小指の側へ絞り込み且屈曲する要領拙きを以て、刀尖の働き利かず、刀柄の部位即手許下りて斬撃量小となるを一般とす、故に斬り下したる際刀尖部位、刀柄より遙かに低くなる如き氣持にて斬り下すを可とす。

斬撃量は力學上速度に關係すること大なるを以て斬撃の要領を正當に體得したる後は逐次速度を増加するを可とす。

○「正しき刃筋」

思ふ所を眞直に正しく斬る如く練習するを要す。

左右平等に足を踏み付け、頭上に刀を眞直に振り被り兩手に平等に力を入れて斬り下すこと

必要なり。

思ふ所へ斬り込み得たりと雖も往々手元下るものあり又左右に傾くものあり。左右に傾くものゝ内斬り下す途中過早に一方に力を入るときは其の反對に傾き又斬り込みたる後、手の握りに弛みの生じたるものは、多くは其の反對側に傾くを一般とす、故に最後迄掌中の握りを變へざること及兩手の力一方に偏することなきやう特に注意すること肝要なり。

○「斬撃要領」(圖示)

一、斬る前の準備姿勢(躰下丹田に九分通りの氣力を收め將に振上げんとする姿勢)



合場るたし脚開に右左 イ

合場るたし脚開に後前 ロ



被り振に上頭を刀にめ爲る斬、二  
前直るすとんき下り斬に將、リ  
にるたち待てり被り振) 勢姿の  
を性力弾軟柔は身全際此非  
(す要をきなとこる凝ち保

(二) 輕易なる物料に對する練習

前項空間にて斬撃せる要領を其の儘實地に試むれば足れり、然れども空間にて其の要領を試したるのみにて直ちに斬撃量大なる切斷物に對し試す時は、斬撃量大ならんことのみ心に奪はれ、姿勢斬撃要領に於て缺



勢姿るたし下り斬、三





イ、「斬撃準備」

右圖の如く斬らんとする部位を定め其の部位に正對して間合をとり斬撃を準備す。間合をとるには構への姿勢に於て斬撃時の姿勢に準じて刀を前に出し刀尖より約五、六寸の部位を見計ひ斬撃部位に接する如く姿勢をとる。



ロ、斬る爲めに振り冠りたる姿勢

陥を生ずることありて、手解を遣り直すの已むなきに至ること屢々なるに鑑み、先づ輕易なる斬撃より漸進的に教育するを適當とす。

○「斬撃の要領」

空間の場合に同じきも特に姿勢及斬撃要領體得を主眼とす。

此の際斬撃量に捉はるゝことなく最初決定せる部位に對して眞直に水平に切り下す。又左手元を低下せしめざることに注意す。

斬撃は躊躇することなく大

業にて實施し、斬撃後思ふ所を正しく斬撃せしや否やを一瞥したる後、刀を引き抜きつゝ、一步後退す。然る後、斬撃部位を點檢し、斬撃方法の適否を反省し更に刀に就て其の屈曲、刃部損傷の有無等を點檢す。

ハ、「斬撃の要領」

備考 柄は切斷容易ならざるも斬撃要領を會得せしむるに便なり

此の際刀尖を低く保持するを可とす。

斬撃部より刀身を抜き取る方法に二法あり。後方に抜き取る方法と斬り込みたる経路を反對に刀を戻しつゝ、抜き上る方法とあり、何れにせよ竹、骨或は金屬等に斬り込みたる際は正しく刀の軸心方向を保持して抜き取らざれば刃部を損傷する憂あり。

(三) 据物斬

前條項の外特に左の件に留意するを要す。

○「間合の取り方」

刀身の中程より手前にて斬り込む氣持にて間合を取りて切り込む。刀尖を利かして斬る要領を會得せんとせば、物打附近にて斬撃する氣持にて練習するを可とす。又刀の鍛錬不十分な



一 新物据 右左に開開  
のもるたみ込り

↑ 二  
↓ 三



るものは刀身前に俯くものあるを以て成る可く物打附近にて斬り込むを可とす。

○「氣力の充實」

据物斬は臺（土壇）迄斬り下ぐる如く目標を定め、且其の氣持にて斬撃するにあらざれば斬撃量大ならず。

従つて大業にて最大の速力を以て而も氣力

が途中にて挫折せざる如く注意しつゝ臺に斬り込みて後止むる如く、絶えず氣力を繼續するを可とす。

間合の取り方稍と遠きに過ぎ、而も基礎的諸條件を無視して腰を引きて斬りつけ或は斬りつゝ後退して地面に斬り込み或は自分の足に斬り込むものなき様留意するを要す。

□ 乘馬片手軍刀術、片手斬

(一) 段 階

○「徒歩にて行ふ方法」

徒歩は乘馬したると同様の氣合及速度（最初は其の場、次に駈歩にて）にて設備せられたる目標に對し試斬を實施し、主として刀を振上ぐる時期、双筋の方向、斬撃時の握り締め（拳の位置）等を練習す。

○「乘馬にて行ふ方法」

徒歩にて練習せし事項に就き、乘馬にて更に之が向上を圖り完成を期す。

(二) 斬撃の要領

○「刀の操作」

刀の握り方竝に握り締めは、徒少片手軍刀術に準ずるも、乘馬片手軍刀術に於ては斬突の好機瞬時に過ぎ去り時機を失すること多きを以て、斬撃は敵の左肩から右脇へ向ふ如く對角線的に而も押斬を可とす、此の際馬に危害を及ぼさざる爲、右拳は概ね肩と等高に右前方に保持するを要す、馬の速度及刀の操作の遅速に依り一定し難きも、駈歩にて行ふ場合は假標前二、三米前にて斬撃の動作を起すを可とす。

(三)、斬撃時の諸注意

騎坐の堅確なること。

馬の誘導を適切ならしむること。

斬撃の際左拳に動搖をあたへざることを。

○「斬撃の要領」

劍術教範詳解の挿繪中「乘馬軍刀術に於ける試斬」を参照。

2. 刺 突

イ、要 旨

刺突は實戰に於て多くの場合初太刀にて奏功せるもの多し、而も平素軍刀術の練習十分ならざるものと雖も奏功しあり、故に平素軍刀術修練に於ては一層突きを奨励すると共に軍刀の試斬

に於ても突を體驗し之を實用化する如く努む、刺突部位に就ては實施法の概要の條項を参照。

(註) 往々戰場に於ては日本人の本能として咄嗟の間反射的に斬撃動作をなす者多きが如きも、實戰の成果を見るに、初太刀にて奏功せるもの比較的尠く、數回斬撃を反復し漸くにして奏功せるもの多きが如し。

ロ、刺突要領の基礎的練習

(一) 刀の保持

右手は過度に鏝に密接せしめざること及兩手を滑らざる如く握り締むること、鏝なき刀は外傷を生じ易きを以て必ず儲付となすべし。

(二) 刺 突 (教範第五十二、突の要領)

刺突時兩手の握り締め弛まざる範圍に於て、左拳を前上方に擧げ、刀尖を利かす如く兩前膊を僅かに内旋するを可とす、此の際右手の力の入れ方過早となり、また其の力左手より大なる場合は、左方に劍尖移動し、思ふ所を刺突し得ざるのみならず、刀を屈曲することあり。一步突進しつゝ刺突するには、上體を前屈することなく、左足尖にて踏切ると共に刺突し腰の推進に伴ひ刀尖を十分に利かす如く突き出す。

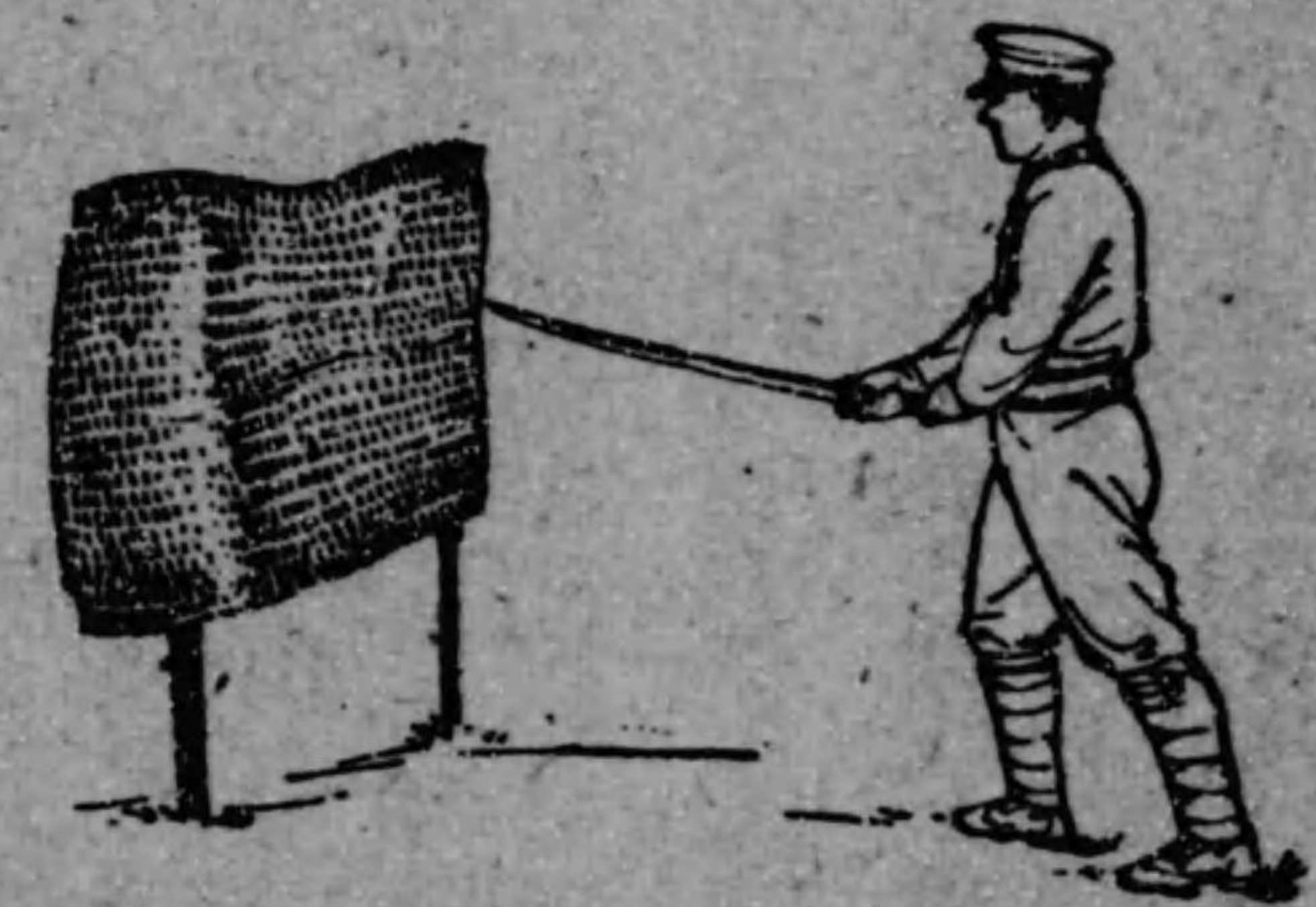
刺突後は突刺したる經路を眞直に引抜く、引抜動作は「軍刀の操法」に準ず。



勢姿の時突刺



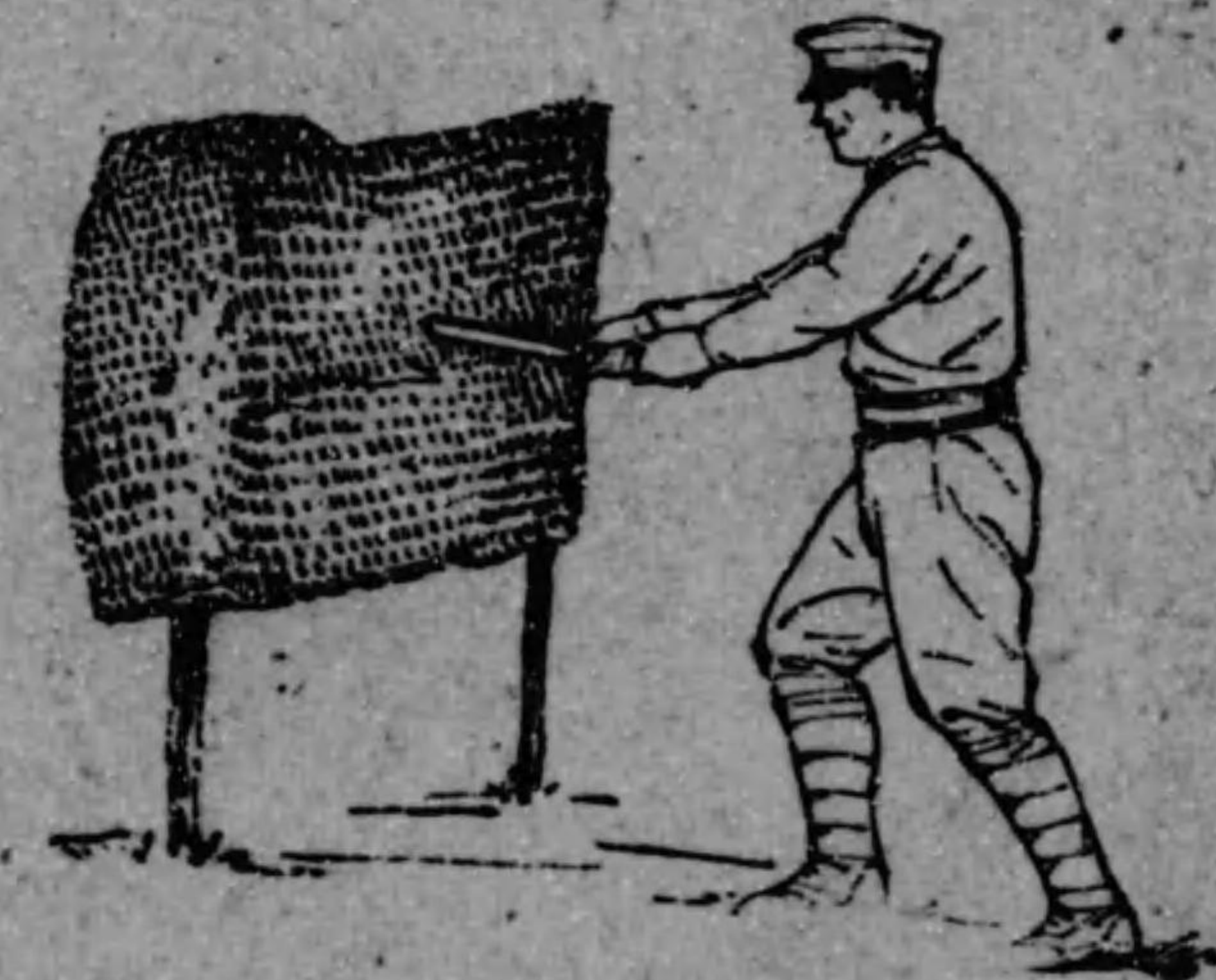
突刺るす對に標假



勢姿備準突刺るす對に科物るな易輕



突刺ふ行てけ向に方下右を刃刀



勢姿の時突刺

(三) 刺 突 時

ハ、輕易なる物料に對する練習

(一) 準備姿勢

刺突せんとする位置に正對す。

刺突したる姿勢を採りて刀尖僅かに被刺貫物より離るゝ位置に準備姿勢をとり、要すれば刀の經過を數回反復練習したる後、氣合の九分通り滿つるを待つ。

(二) 刺 突

氣力を充實すると共に敢然左足にて踏切り、突進しつゝ刺突す。此の際其の儘の姿勢を保ちつゝ思ふ所を刺突せりや、刀尖の方向可なりや、兩手の握り締め可なりや、兩足の開き及下腹部の力は適當なりや、上體は前屈せざるや等注意し點檢したる後、眞直に後退しつゝ引抜く。

此の際數回同一動作を反復し其の要領の會得を十分ならしむ。

「軍刀の操法」と相俟ち一舉動にて引き抜き動作を練習す。

ニ、假標に對する練習

氣力充實するや果敢斷行するを要す、不用意の實施は失敗すること多し。又要領の會得不十分

なるものは前項の輕易なる材料に對する刺突を練習し、其の奥旨を得たる後本訓練に移るを可とす。普通の材料に對しては、鍔元迄刺貫する意氣を以て行ふを可とす。「軍刀の操法」と相俟ち熟練するに伴ひ刺突後の引き抜きを迅速ならしむるを要す。

### 3. 斜 斬

#### イ、要 旨

敵の死命を制する爲に斬突部位を選定すべきことの必要なるは言を俟たず。近代の戰鬪法に於ては敵は多くの場合鐵兜を冠りあり、鐵兜の頭上より斬撃或は打撲により之を斃し得ること無きに非ざるも普通人には難事たるを免れず、故に多くの場合首、胴等を選定せざるべからず、右斜より斬撃すべきか、或は左斜よりすべきかは状況に依り異なるべしと雖も、右斜よりするを可とする場合多し。

劍術教範第五十三による面の斬撃左(右)斜下方に斬り下ろす要領にて斬るを適當とするを以て劍術教範に準ずれば可なり。

#### ○「戰

明治九年熊本に於ける神風連の鎮臺將兵を夜襲したる際に於ける刀創を蒙れる官軍側の病院收容者の統計の示す所に依れば、右斜よりの負傷最も多く又日露戰役に於ける九張嶺の夜襲に於

て率先陣頭に立ちて奮戦せられたる三浦將軍(當時中尉)の例によるも、右斜より斬撃するを有利とする場合多きが如し。

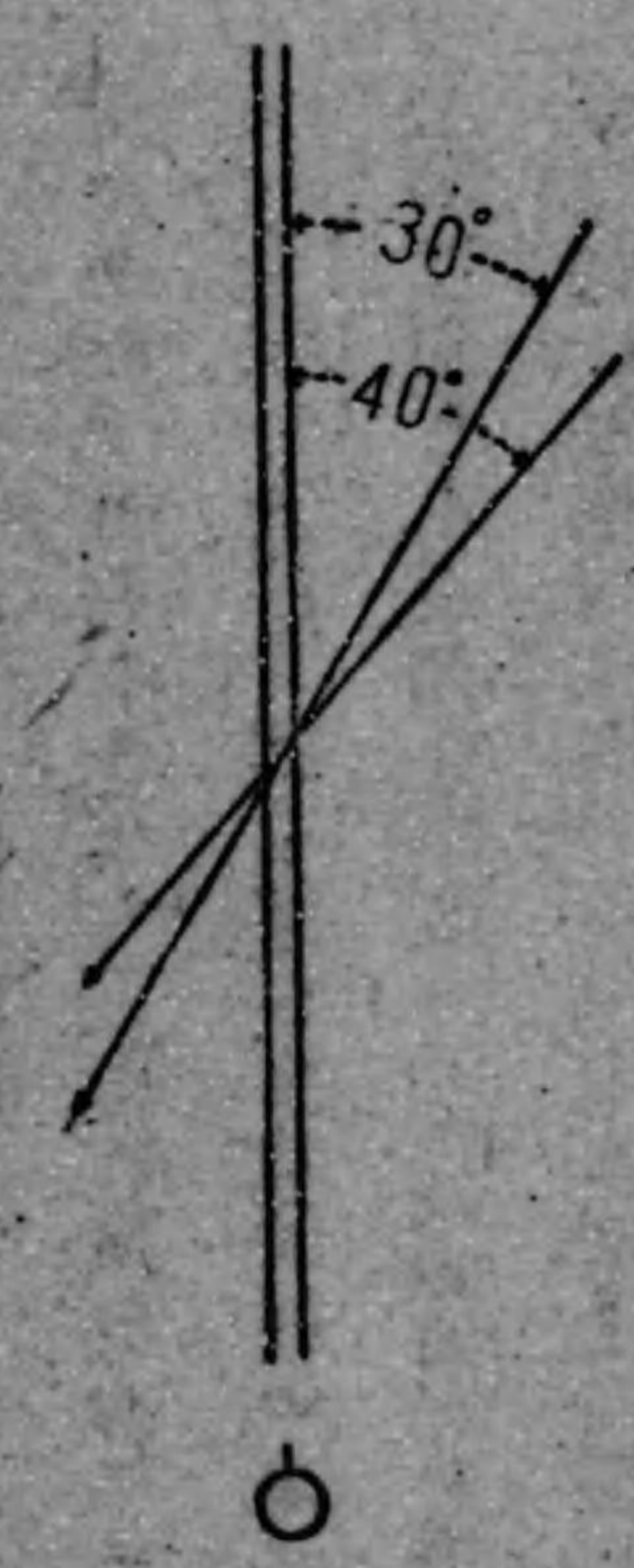
#### ロ、斜斬要領の基礎的練習

##### (一) 足の開き方

足の開きは初心者には前後に踏み開き、斬下げたる場合、切尖の下る方の足は最初より後方へ引き、或は刀を斬下ろすと同時に其の方の足を引くを可とす。足を前後に開く程度は刺突時に準ず。

##### (二) 斜斬の要領

角度は大體三十度乃至四十度を標準とす、角度の大なるに従ひ斬撃困難なり、初心者は角度の大なるもの多し、斬撃は刀の鍔元に近き部位が先づ物體の斬撃部分に接し遠心力を利用し且刀尖を十分利かせつゝ足の態勢に準じ斬り下ろし、刀尖に近き部位にて被切斷物の最後の部分を斬り終る如く斬付くるものとす。大業にて振上げたる刀の反動を利用し、右上よ





り左下に斜に斬り下るす際は、要すれば少しく體を左方に向き換ふる氣持を以て斬り下げ、手のみにて斬ることなく、特に腰の力にて斬る、斬り下げたる際兩手は下腹前にあるを至當とす、手元を上げ、肩を怒らす時は往々足又は膝に斬り込む等不覺をとることあり。壁等に面し右の如き角度(六九頁挿圖)を描き練習し刀の經路を點檢するを便とす。上圖動作を數回試み、斬撃後は兩手の握り締め、刀尖の位置、双筋姿勢を點檢す、而して漸次速度を増加して練習し次で斜右下に斬る要領に移る。

ハ、輕易なる物料に對する練習



前 斬 斜、一

(一) 篠竹一本に對する法

斜切りの要領を會得するに適當なる方法の一なり、目標に向ひ十分角度に注意し、全力を集中し斜斬りすべし。輕卒なる動作を以てすれば叩き折るが如き結果となり、外傷を生じ刀尖を地に斬りつけまた甚しきは刀を放出すなど危険を伴ふに至る。

(二) 斜 斬 時(圖示 斜斬前、斜斬直後)



姿勢るたり冠振、二

後 直 斬 斜、三



一、斜斬前 刀の手元に近き部位にて物體の斬撃せんとする部分に對し、斬込む方向に刀刃を傾け稍と手を伸して間をとり呼吸を計り氣の滿つるを待つ。

注意 刀を頭上に被りて休むが如きは大業の主旨に反するものとす。

三、斜斬直後 空間にて實施したるより更に大なる力を要するを以て腰に力に入るに伴ひ體を半ば左方に向け又左足を後方に引く場合多し、此の際過度に重心を低下し又上體を前屈し兩手の握り締めを誤る等なきやう注意すべし。

斜右下に斬る要領は前項に準ず。

ニ、立物に對する練習

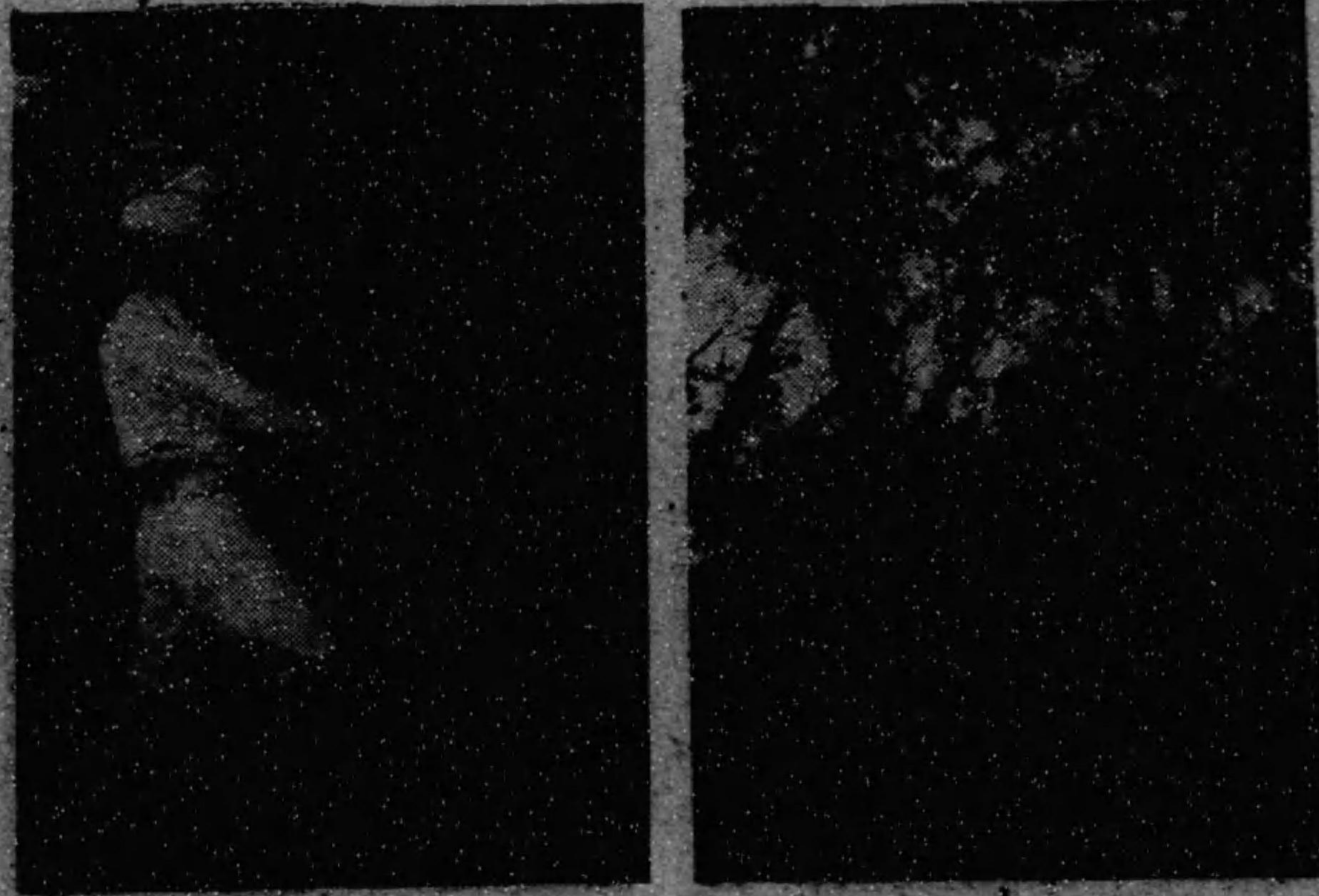
(一) 準備姿勢及斬り方

習熟するに従ひ稍々大なる竹入立藁に對し練習す、初歩者は樹木等に懸吊したる束藁を斬撃せんとするに際し刀刃の觸るゝ程度に兩手を伸し、高さ及間合を規正し氣の満つるを待て斬撃す。懸吊束藁の高さを下端の部位より斬捨て逐次束藁の高さを低下する如くせば數回に互り同一束藁を利用し得べし。被切斷物の大なるに伴ひ特に氣勢を充實し切斷せざれば已まざるの氣概を以て全力を集中して大業に斬附ること必要なり。

注目點は斬撃開始部位よりも寧ろ切斷部分を見透し切斷し終る最後の部分を目標とし、氣合も亦刀尖竝に手先が最後の部分を通過し終る迄永続的に注視するを要す。被切斷物大なる場合、特に内部に堅き物體ある時は途中兩手の握り締め度合弛み勝となるを以て斬付けたる方向を確實に保ち切斷せんとする初一念を最後迄保ち兩手の握り締めを弛めざるの確乎たる信念を必要とす。未だ十分切斷し終らざるに、兩足後方に下る時は往々にして全部を切斷し得ざるものとす。腰を左方に廻して半左向の姿勢となり、腰の力を利用して斬る時は比較的容易に切斷し得。

#### 4. 特殊の訓練

正面斬、刺突及斜斬の三方法は何れも基本教育の練習として停止して行ふものなり。斯くして自己の軍刀に對する信頼及斬撃法の伎倆に對する信念は一通り修練し得たり、然れども戦場の實相



立前斬 3



後直斬 4



新 斜 突 東 臺 物 振

一、隊 形

1. 数人同時に行ふ時は必ず一定の方向に行ふを可とす。
2. 実施者相互の間隔は二米以上離隔しあ  
るを要す。
3. 見学者は実施者より二米以上離隔し實



新 斜 突 立



に鑑る時は未だ及ばざる事速し、故に各種状  
況下に體驗を重ね、なし得れば更に前進しつ  
、斬撃刺突する要領及移動する目標物體等に  
對する使術をも體驗し置くを可とす。  
刀の持ち方及歩法並に斬撃刺突法は「軍刀の  
操法」に準ず、此の際足場に注意し、滑順せ  
ざることを必要なり、夜間又は村落内等に在り

ては不意に備ふる爲には右八相（兩手にて刀

柄を握り刀身を右肩前にあらしむ）の構へを  
適當とすることあり。刀を兩手に持ちて中段  
に構へ長距離前進するは速度を低下し不利な  
る場合多し。

五 實施上の注意（全般的危害豫防）

試斬實施に方り終始全般に互り留意すべき  
件は危害豫防にして左の諸項を嚴守するを要  
す。



一



二

新 斜 薬 東 臺 物 据



三

施者の前後に位置することなく、側方に位置するを要す、又絶えず實施者に留意し、刀身其の他の飛び來ることある場合は直ちに之を避け得る如く注意力を集中しあるを要す。

4. 斜斬の場合は距離間隔を數倍開きあるを要す。

二、指導監視

試斬は指導者監視の下に行ひ又刀を所持する者は素りに刀を振り廻さざる如くすべし。

三、刀の受渡

刀を他人に渡す時は刃部を我方にし受取るもの、確實に刀柄を握り、且「よし」等合圖ありたる後手を離すを可とす。

四、機能不良の刀

鯉口發條弛き刀に於ては刀柄を下方に傾くるや、往々刀身俄かに抜け出づることあり此の際周章狼狽して手を觸れて負傷し又地に落し足に負傷することあり留意すべし。

五、環境の整理

1. 前後に通行人なきやう監視すること必要なり。

2. 地面に石、砂利等刀の切尖を毀損する如き物を除去しをくべし。

六、刀の準備及手入

一、試斬實施前に於ける刀の準備

1. 白鞘刀

白鞘刀は必ず切柄を利用して拵付刀はなし得れば鈔ある物を利用するを可とす。

## 2. 目 釘

目釘は必ず一斬突毎に點檢し折損等の不安なからしむるを要す。

某所に於て試斬を實施中目釘折損の爲、刀身拔出で見學者の腹部を刺貫せることあり、故に實施に先ち、目釘は有りや、切損しあらざるや、孔の大きさに比し弱小なるものなきや等を點檢し、要すれば取換ふるを要す。

目釘に使用する竹は三年生以上の竹材中肉厚き部分にして、適當に乾燥せるものを選定し目釘穴に適合する大きさに削り挿入するを可とす。

## 3. 嫉 刃

試斬りを行ふに際し刃部を點檢し、要すれば嫉刃を合はすこと必要なり。特に減刃せる刀に於て然りとす、恰も牛肉屋の肉を切る前に庖丁に鑢をあてる如く砥石を使用し刃を立つるを可とす。

## 4. 刀の曲り直し

刀の屈曲しあるものは臂力により概ね修正し得、即ち藁束等の固定物に對し直角に刀を載せ屈曲せる部分の反對側を上面にし、刀身の切先に近き部分を固定物に托し、屈曲せる部分を反對の手を以て徐ろに壓迫するを可とす、此の際刀及手を滑らさざる如く留意すべし。

## 5. 刀の損傷豫防

試斬直前に刀身に油を塗り又は水を注ぐ時は刀に「しけ」疵の極く輕微なるもの」の生ずるを防ぐに效果多し、水を注ぎたる刀は刀尖を下にし刀の中心に水の入らざる著意必要なり。

### 一、試斬後に於ける刀の手入

#### 1. 水分除去

試斬實施後刀の表面に附着せる汚物は直ちに水洗ひせざる時は乾燥して除去し難し。血の附着せる場合、鹽水にて洗ひ落し、後清水にて洗はば多くは洗ひ去ることを得。

#### 2. 手 入

刀身を鞘に收むる前には必ず手入を行ふものとす。

先づ水洗ひをなし、附着物を除去し、乾燥せる布片を以て水分を除去し、打粉を使用（各表面に普遍的に塗布）し拭紙（奉書を使用するを可とす）を以て徐ろに拭ひ、水分及打粉を除去したる後、油（上製の丁字油と椿油との混合せるもの）を刀の全表面に斑の生ぜざる如く塗るを可とす、以上の如き手入をなし得ざる場合と雖も水氣を去り塗油（スピンドル油の類にて可なり）したる後鞘に收むるを可とす。

### 三、試斬と刀の損耗

試斬は實際戰場に於て自己の生命を託すべき各自の軍刀を以て平素より練習するを可とす。然れども試斬りの回を重ねるに従ひ、如何なる業物と雖も多少の損耗を來すを一般とす。然れども刀の損耗を虞れて戰場に使用すべき軍刀にて一回も試斬りを行はざるが如きは、日本刀即ち我れ、我れ則ち日本刀と謂ふべき一體不二の信念に合致せざるものと謂ふべきなり。故に平時爲し得れば訓練用の刀を用ひて腕を鍛ふるのみならず、時に各自の軍刀を振ひて試斬を行ひ必勝の確信を得ること緊要なり。

七 試斬に使用する資材

一、刀

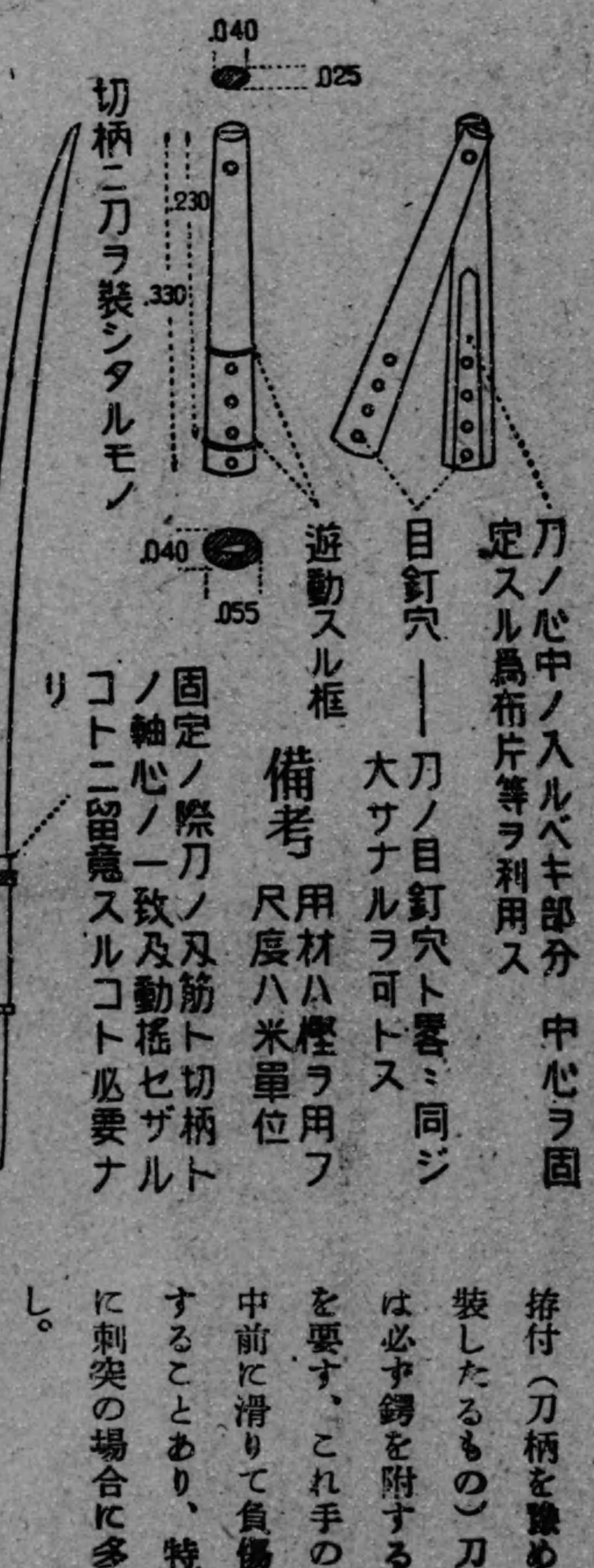
1. 白鞘柄

白鞘柄は兩手の握り締め悪く手の中滑ることあり柄割を生じ又目釘堅固ならざるもの多きを以て危険なり。

2. 切柄

切柄は實用的に構造しめらざる刀を試斬せんとするとき柄に代用するものにして其構造左圖の如し。

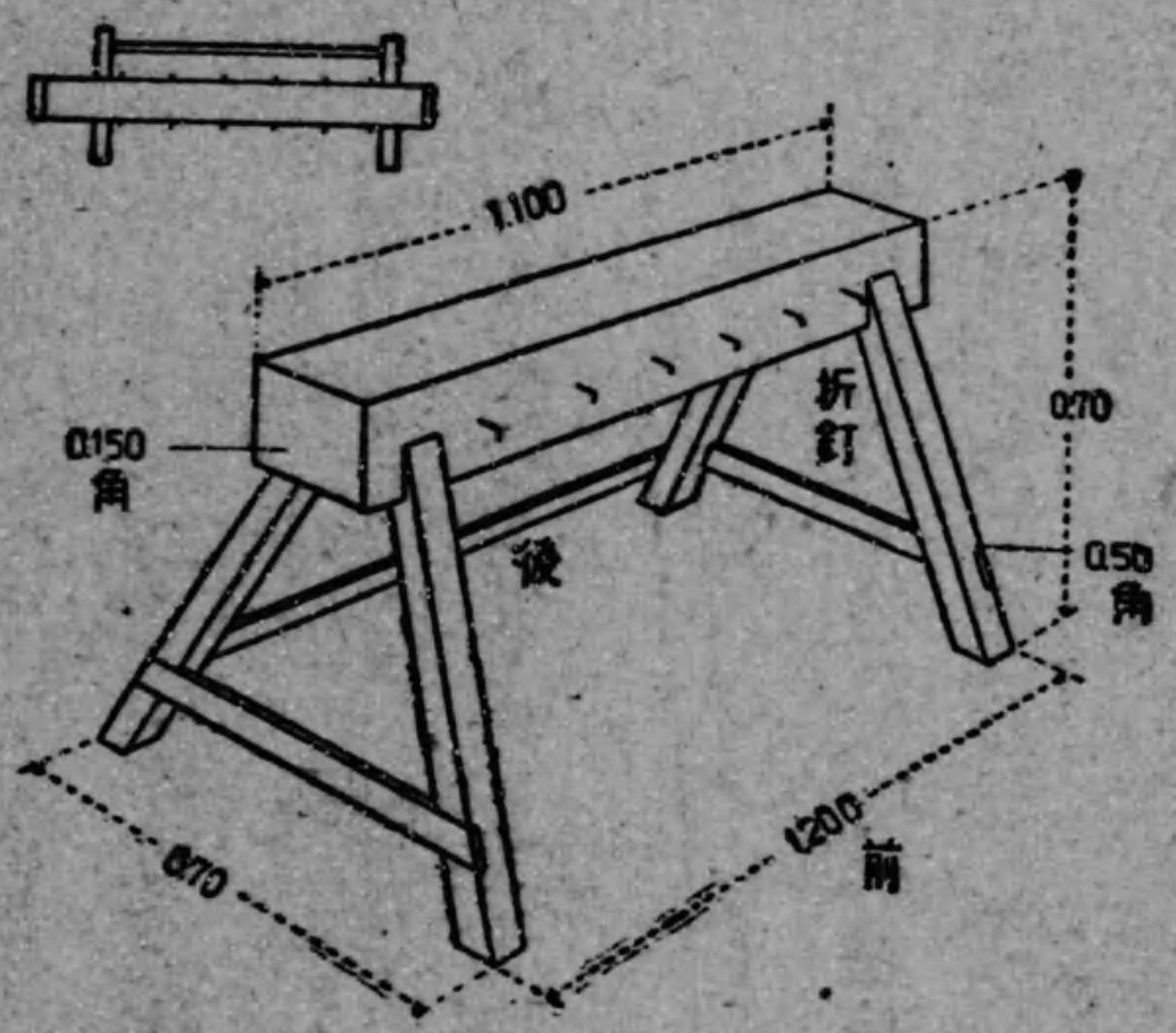
3. 鍔



束藁は通常用ふる被切斷物にして米俵一俵にて作る。其の製作法は米俵の繩を解き米土砂等を除去したる後、堅く巻き約十五纏を間して五、六箇所を繩にて緊縛す、目的に依り束藁の中央

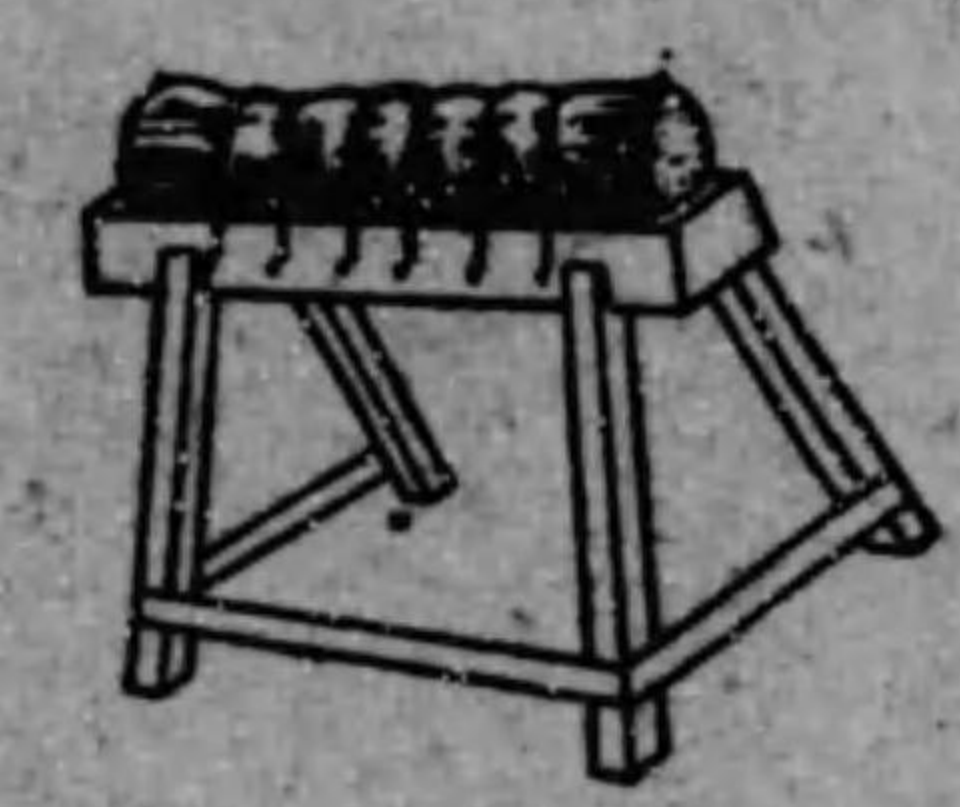
に細き青竹を入れて抗堪力を増し、又は稍と太き丸竹を入れて締切の支柱に應用することあり、束藁は試斬直前概ね一晝夜清水に浸して後使用するものとす。束藁を切

2. 應用材料  
 断し得るものは克く人體の裸脚部を切斷する力を有すと稱せらる。

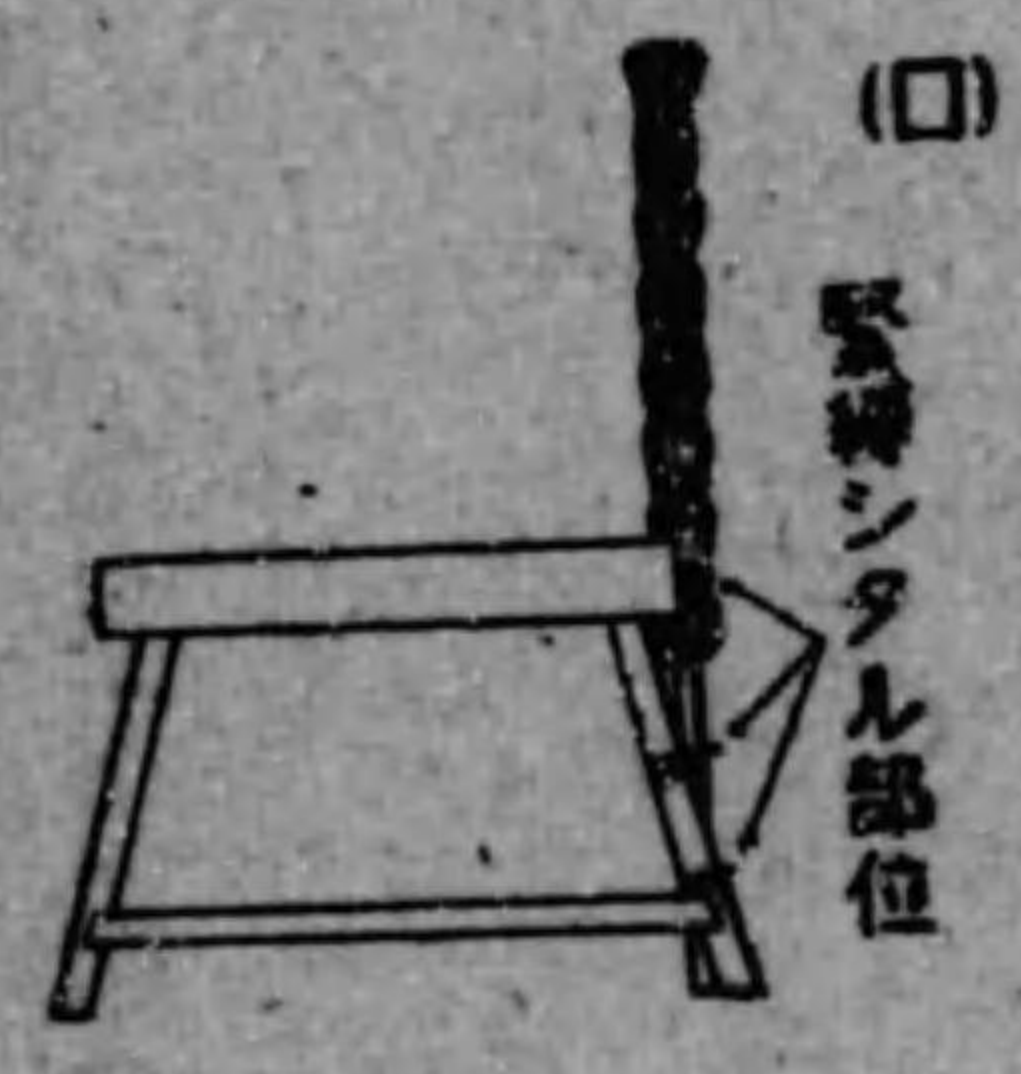


用材は松樅等硬度大ならざるを可とす、折釘は前後對稱なるを要す、尺度は米單位とす、直斬の爲には斜切の爲には口の如く要す

切臺に巻藁二把を緊縛したるもの、時として兩端のみを緊縛し行ふことあり



藁の中心に青竹を挿入したるものを側面に緊縛したるもの



縛者は緊確に且緊縛の紐は切斷面に直角に、斜切にありては眞直に固定するを要す切臺の利用法は多々あるを以て其の一例を示せり

高粱の莖、細長き樹枝、細篠竹、青草等を束ね又白菜、甘藷、大根、南瓜等現地所在の物料を利用し容易に供用し得べし、刺突の爲には右の外、鉄剣術用各種假標類を其の儘利用

し得べし。其他踏固めたる雪、獸類等を利用するを可とす。

3. 堅物

堅物試斬は普通一般のものは行ふの要なし。刀の抗塔力を試し或は被切斷物の抗力を試す爲實施することあり、特に銃身、鐵兜に對しては多くは刀刃に缺損を來すのみにして、鐵兜の上より致命傷を與へ得るは特別の場合に限るを以て寧ろ斬鑿部は金屬のなき部位を選定するを適當とす、故に本書に於ては堅物の試斬實施法を省略せり、又危害豫防に就ては種々の施設を要す。

三、臺

1. 斬臺

斬臺は被切斷物を裝置する臺にして、隨時隨所に設置し得べき左の如き材料を使用するを通常とす。



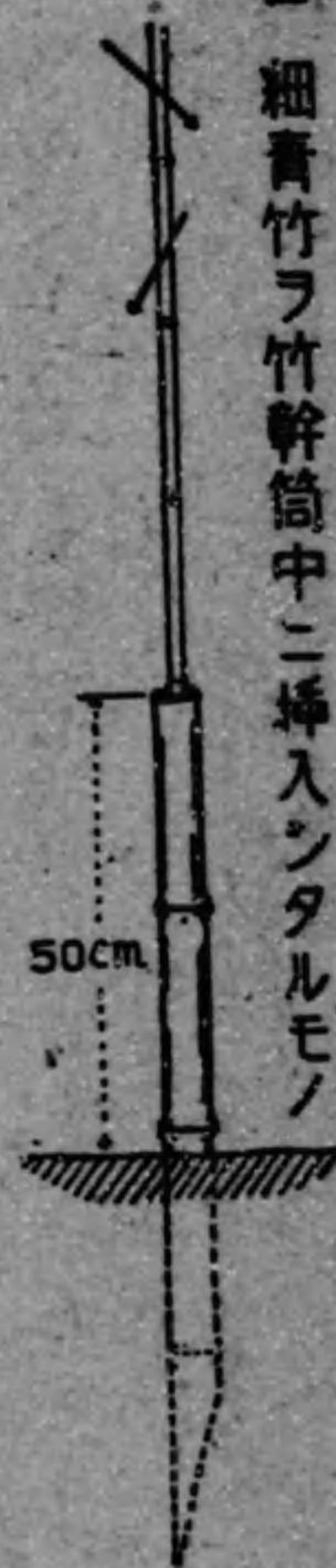
(イ) 高粱莖數本ヲ木杭ニ縛着シタルモノ

2. 立高正面斬臺

地上高さ約一米五・六十糎となる如く、八の字形に木材を組立て、頂上に横たへたる枕に取付けたる束藁を斬るに供す。

其の他

(ロ) 細青竹ヲ竹幹筒中ニ挿入シタルモノ



3. 補助 杭

地中に直立することなく他の杭を利用し支柱となし、之に縛着することを得。

(ハ) 樹枝ニ束葉ヲ懸吊セル一例

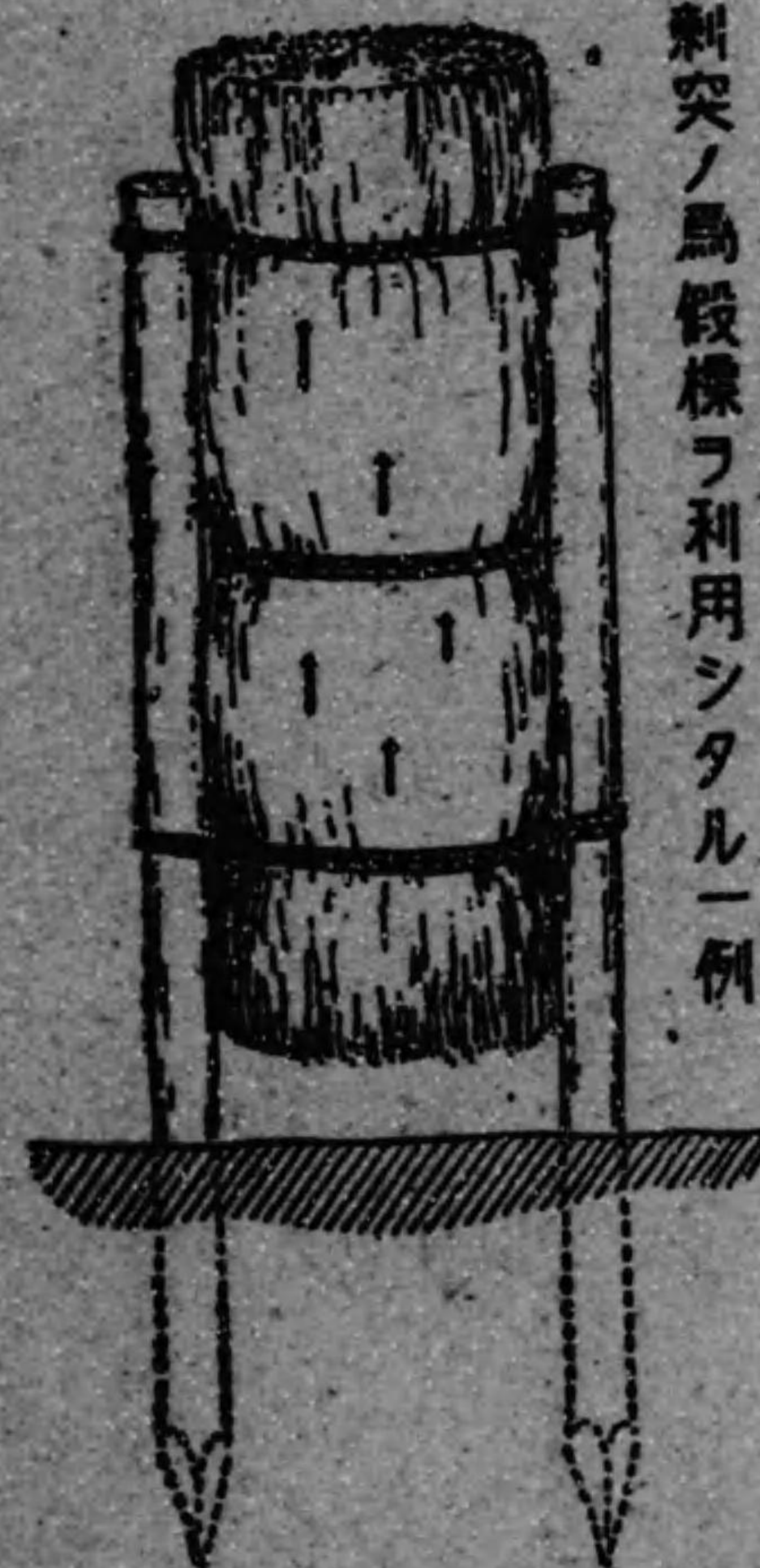
此紐ノ高サハ刀ヲ振上テタル時樹枝ニ刀尖ノ觸レザル程度トス



針金一垂直ニ吊ス爲便ナリ

此紐ノ弛メニヨリ束葉ノ高サヲ低クシ數回練習スルコトヲ得

(ニ) 刺突ノ馬鞍様ヲ利用シタル一例



又地面に垂直に直立すること必要なり、然らざれば双筋を正しからしむること難し。

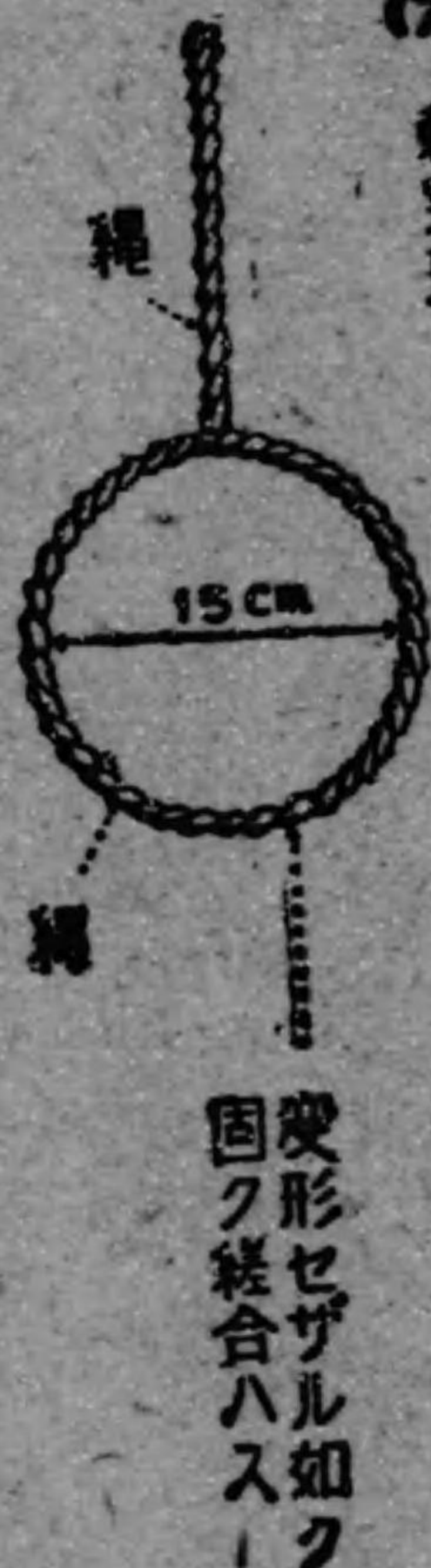
地上の杭の高さは演練すべき斬撃刺突高に依り差異ありと雖も過高なる時は杭に

斬込む患あるを以て實施者に不安を感じしむ。

特に鐵杭の場合然りとす、何れの場合にありても高さは五十纏を基準とするを可とす。

4. 其の他 (圖示イ)(ロ)(ニ)

(ホ) 刺突環



變形セザル如ク固ク結合ハス

空間刺突の練習に用ふる時は引抜動作を會得し易からしむ。大體其の場刺突にありては、直徑一五纏、突入刺突に於いては二〇纏位を適當とす。

四、資材の工夫

此の種材料は尙他に入手簡便、低廉なるもの多きが故に一層創意を努め工夫を積み容易に其の目的を達成する如く研究を重ねざるべからず。



昭和十九年三月十五日印刷  
昭和十九年三月二十五日發行

承認番號 430.790



文化出版協会の印

著者

陸軍戸山學校將校集會所

發行者

鈴木 木 初 雄

印刷者

東京都神田區神保町三丁目十三番地  
西野 末 雄

印刷所

東京都本所區東駒形三丁目十番地  
文化印刷株式會社

發行所

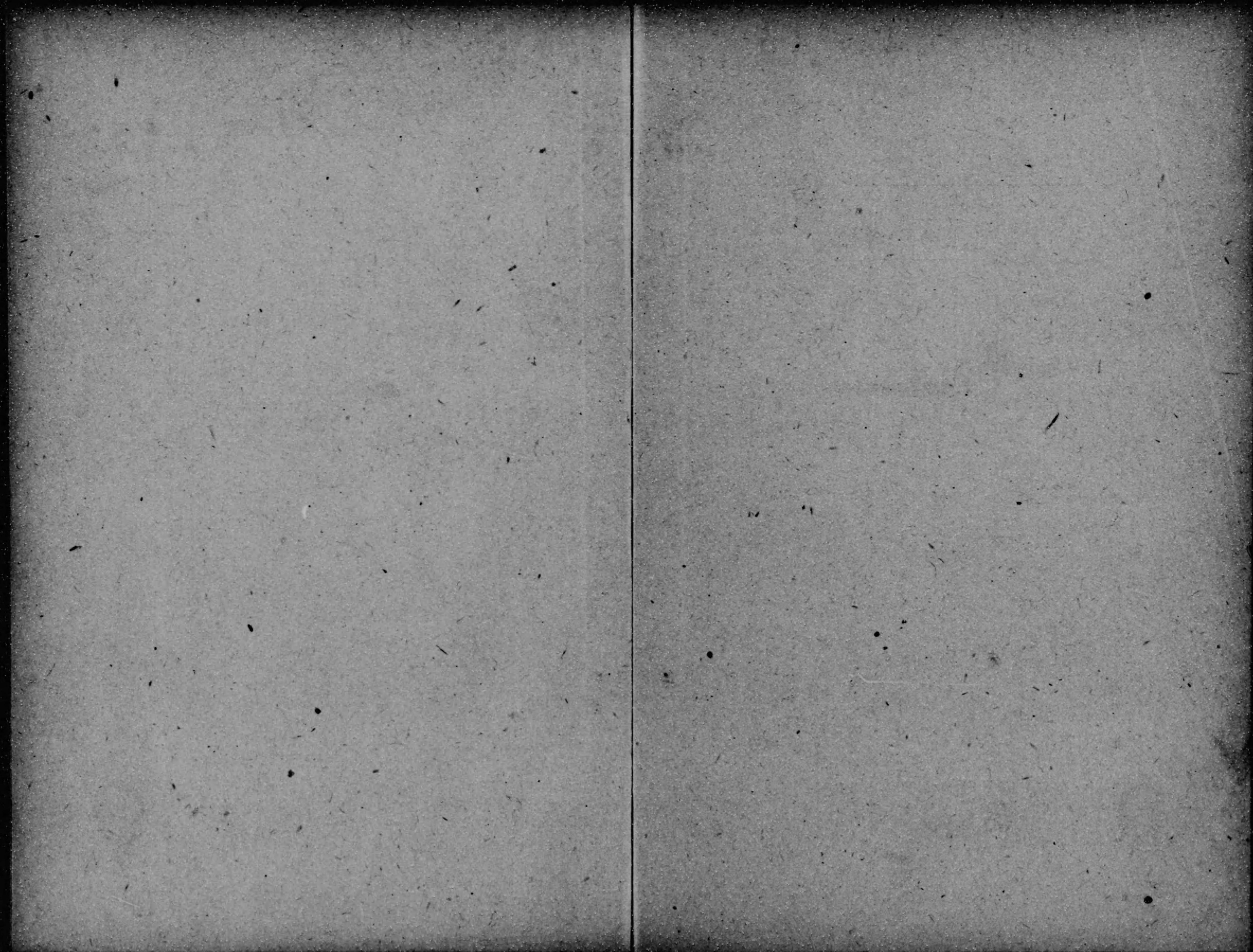
東京都神田區神保町二丁目十三番地  
國防武道協會

配給元

東京都神田區淡路町二丁目九番地  
日本出版配給株式會社

(協) 定價七拾五錢  
特別行爲稅一錢  
賣價七十六錢

號八〇二〇一一員會會協化文版出本日



製本控

何第 號

973

冊

160

號

年

月

日

書名 軍刀の操法及試斬

著者 陸軍戸山学校 編

至入 19年5月9日

備考





973
160

